ナ』あり。

バウルは、千八百二十五年十一月十四日バイロイトに死せり。バウルは、當時に在つて他の詩人の如く、其名世人に聞えず、後に至りて、或一派の人よりは、其作を極端なる情的生活を叙し、且つ無趣味なる理想を述ぶるものなりとし、又文辭の修飾足らずとて、非難を受けたり。然かりバウルの作は、散文の摸範となすに足らざる可し、されど獨逸人の心性生活を詩的に叙したる點は、大に多とす可き價値あるなり。

(2) フリードリヒ、ヘルデルリン。

千七百七十年三月廿日チッカールに近きラウフェンに生まる。千八百二年詩才將に熟せんとする頃は既に憂鬱病に罹かり、四十余年の間を憂苦煩悶の裡に送り、千八百四十三年六月七日チユービンゲンに憂死せり。蓋しヘルデルリンは、獨逸詩人中最も不運なる人の一に數ふ可きなり。

ヘルデルリンが生れしチッカールの地は、壯麗を以て名あるハイデルベルグ城を望み、山水秀麗の地なり。此間に人となりし詩人は、天然の美

を賞し、自然の妙を愛し、常に塵俗の世を遠ざからんことを願へり。且やヘルデルリンは、ルソー、オッシアンの文を喜び、クロップシュトックの詩を好み、シルレルの『ドン、カルロス』曲の世界一家主義に深き仝情を寄せたり。かくの如きの天地に棲息し、かくの如きの思想を養成したるヘルデルリンが、現實の世界を離れて、一種の夢想的世界を腦裏に描きたるは、理の當然と云はざる可からざるなり。

ヘルデルリンは、幼時より空想兒なりしと雖も、亦學窓の人として勤勉なりき。そのチユービンゲン大學に在りし時は、ヘーゲル、シェリングと哲理を談じて、議論を上下したりと云ふ。されど憂鬱性のヘルデルリンが最も幸福なる生涯を送りしは、自然と語り、眞理を默考するの時に非ずして、人情の暖かきを悟りし時なりき。千七百九十六年ヘルデルリンは、フランクフルトの銀行家の家庭教師に聘せらる。情に厚きヘルデルリンは、忽ち才氣優れたる敬愛す可き家婦と意氣相投合したり。

此頃小説(ヨ)『ヒュペリオン』成れり、これ希臘の青年が、土耳古政府に反

第四編　新南獨逸學時代の文學(宗教改革より現代迄。)(クリシチスムス及びロマンティスムス。千七百四十八年より千八百四十八年迄。)○クリシチスムス。)　第十章　シラー、バウル。フリードリヒ、ヘルデルリン。　五〇五

抗して、亂を起さんとしたる事實を骨子としたるものなり。書中に出づるディオティマと云へる婦人は、此家婦を描きたるなり。ヘルデルリンは、家婦との交情日に暖かになり、幸福なる生活を送りしも、遂には家主の嫉妬心の爲めに邪推され、此家を去らざるを得ざるに至れり。此後はヘルデルリンが、顏面蒼て喜びの色を呈せざりし時にして、鄉里に退き、ホムブルグに行き、チユービンゲンに遊び、一時は癲狂院に投ぜられて、病氣保養に怠なかりき。されど只僅かに一年餘佛國に學校教師となるの間精神回復の徵見えしのみにて、病は益度を高め、遂にこれが爲めに斃るゝに至れり。

さてヘルデルリンが、最も渴望したる所は、自然と人類との調和にてありき、而して其理想の人類は遠き昔の希臘人なり。されば其願望は、到底實現す可からざりしなり。人は理想を實現せんが爲めに苦み、若し己の描く所の理想にして能く實現す可からざるを悟るに於ては、沈鬱に陷る可し。ヘルデルリンは、實に理想の破壞を痛嘆して、終生不治の精神病に惱されたるなり。

ヘルデルリンの作を一貫する根本思想は、先づ一の高遠なる理想ありて、外界の事情之を破壞し、其破壞を悲むに在り。されば、ソフォクレスの作を譯するにも、悲劇『ケーニヒ、エディプス』『アンティゴネ』の如き深き痛嘆を以て終る可き作を選べり。自作小說『ヒュペリオン』又然かり、エトナの噴火口に身を投じて死したるエムペドクレスの事蹟を題目としたる悲劇（タ）『エムペドクレスの最後』の如き、此思想の發現の最も顯著なるものなり。

ヘルデルリンは、非凡の詩才を有したりと雖も、構思極めて拙にして、其長所は、措辭の精練に在りしを以て、小說、劇詩は共に其構成を誤れり。要するにヘルデルリンは純然たる抒情詩人なりしなり。『故鄉』『日沒』『運命の歌』等の諸篇聲調沈痛、語辭雅麗誠に名吟と稱す可きなり。

タ. Der Tod des Empedokles

○ロマンティスムス。

第一章　緒論。

ロマンティスムスは、クラシチスムスの反動として起れり。前者を上古文藝復興(アンティーケ、レヂイサンス)なりとせば、後者は、中古文藝復興(ミヂテルアルテルリヒェー、レヂイサンス)なり。而して中古とは獨逸の中古を呼ぶものにして、上古とは、希臘の古代を指して云へるなり。

さてロマンティッシュなる形容詞の語原を考ふるに、ロマーン、ロマンテ、ロマンチェ等より來れり、而して此等の語は、皆架空的想像談の意義を有せり、故にロマンティッシュとは、小說的冒險的の意なり。

十八世紀より十九世紀に亘る獨逸國民の狀態を察するに、思想界の活動は盛にして、其極終に實世間と遠ざかり、空想に融するに至り、バウルをして、獨逸人は、空を支配すと云はしめたるも、誠に無理ならぬことなり。かのロヂク、シヤフツベリ、ヒュームによりて、唱道されたる開明主義は、

ボルテールによりて、英より佛に傳はり、モンテスキューは、此主義を法律に應用し、ディデロー、ダラムベールは、百科全書を著はして、學術全般の討究をなし、世に人智によりて、明かにする能はざるものなしとの考より、開明主義を實行せんとせり。

かくの如く開明主義者の考によれば、人は智力のみを以て立つ可し、感情、想像は、無用の長物なりとせり、而して其結果として、文藝、美術の根本法則を打破したり。カント、レッシングは、開明主義が轉じて、幸福主義となれる弊を觀破して、一は嚴肅主義他は古代の人道主義を唱道して、人心の腐敗を救濟せんとしたり。カントのカテゴーリッシェル、イムペラティーフは、幸福主義に、大打擊を加へたるものにして、レッシングの『ナータン、デル、ワイゼ』は、異教者を迫害するは、文明國民のなす可き事に非ざるを說きて、人道主義を皷吹したるものなり。

かくして十八世紀も、早や半を過ぎたり。然るに千七百七十年代に至り、天才主義俄然として起れり。ゲーテは此主義の先鋒として、名聲を轟

かし、シルレルは、徐ろに後陣にありて此主義最後の氣焔を初期の劇詩に吐けり。されどゲーテは、一たび南方伊太利に入り、シルレルは美學の研鑽をなし、兩詩人は翻然悟る所あつて、古代美術尊重の主義を執るに至り、人の理性及び情性を圓滿に熟達せしめ、兩者を調和的に發達せしめんとせり。

ゲーテ、シルレルが、協力して樹立したるクラシチスムスの理想は、現實の社會を離れて、遠き希臘に安心立命を求め、世人の毀譽褒貶を度外視したり、此點より見る時は、兩詩人は、主觀主義、理想主義なり。

ロマンティスムスの創立者たるノヴリス、シュレーゲル兄弟、テイーク等は、クラシチスムスに反抗したりと雖も、其主義の命脈をたどれば、ゲーテ、シルレルを模範とせる傾向明かなり。依て後の批評家『エルテル』の作ある以てゲーテを、ロマンティスムスの鼻祖なりと云ひ、『ユングフラウ、フォン、オルレアン』の一曲は、シルレルをロマンティスムスの先覺者なりと云はしむるに至れり。要するに兩主義の相違は、劈頭に述べたる如くにして、ゲーテ、シルレルは、古代希臘を以て理想となし、ノヴリス、シュレーゲルの輩は、中古獨逸を理想となせしなり。

假へば、鏡面の如き大洋も、時に暴風起つて、濁浪空を排するの偉觀を呈することあり。思潮に於ても然かり、一の思潮は、無窮に永續すべきものに非ずして、世人漸く其思潮の弊を觀破し、且つ之に飽くの時は、必然の結果として、生じ來る可し。此機に乘じて蹶起するものは、天才偉人なり。開明主義に反抗して、自然に復歸せよとの理想を標榜して、文壇革新の氣焔を高めたるは、天才士[illegible]者なり。クラシチスムスが、獨逸文藝界を風靡して、世人擧つて、ゲーテ、シルレルを謳歌するの時に當り、ロマンティスムスの勃興せる故なきに非らざるなり。

十八世紀の終りに當り、ロマンティスムス主義の文士は、派をなして、イエーナに會合したり。依てイエーナは、ワイマールと相對峙して、全派の淵叢となるに至れり。ロマンティスムスに就ては、論じ盡さゝる所多しと雖も、茲にはクラシチスムスとの關係を略述するに止まらん。以下此派

(上)フリードロヒ、シュレーゲル　(上)ルヘルム、シュレーゲル
(下)ティーク　(下)ノヴリス

1. Heinrich von Ofterdingen.
2. August Wilhelm Schlegel.

1. Friedrich Von Hardenberg. Novalis.

に屬する著名なる文士を評傳せんとす。

第二章　ノヴリス、シュレーゲル兄弟、ルードヰヒ、ティーク。

(1)　フリードリヒ、フォン、ハルデンベルグ(詩人として一般にノヴリスの名を以て傳はり、世人多くはハルデンベルクと呼ばずして、ノヴリスと云ふ)千七百七十二年五月二日マンスフェルドのヰーデルシュテットに生まれ、千八百一年三月廿五日ワイセンフェルスに死せり。イエーナ大學に入り、法律を學び、在學中フィヒテ及びシュレーゲル等と交遊せり。

ノヴリスの詩才は、最も抒情詩に秀でたり、されど其詩は、神秘標渺として、明白なる世界觀を缺きたり。宗教と詩歌とを融合して、人生問題を解釋せんとするは、蓋しロマンティスムス派の理想なり。ノヴリスの作にて此理想を發揮したるは、小說(イ)「ハインリッヒ、フォン、オフテルディンゲン」なり。されど此作は完成せずして斷篇なり。

(2)　アウグスト、ヰルヘルム、シュレーゲル。

千七百六十七年九月八日ハノーベルに生まる。ゲッティンゲン大學に於

に關する著名なる文士を評傳せんとす。

第二章　ノヴリス、シュレーゲル兄弟、ルードヰヒ、ティーク。

(1)　フリードリヒ、フォン、ハルデンベルグ(詩人として一般にノヴリスの名を以て傳はり、世人多くはハルデンベルクと呼ばずして、ノヴリスと云ふ)千七百七十二年五月二日マンスフェルドのヰーデルシュテットに生まれ、千八百一年三月廿五日ワイセンフェルスに死せり。イエーナ大學に入り、法律を學び、在學中フィヒテ及びシュレーゲル等と交遊せり。

ノヴリスの詩才は、最も抒情詩に秀でたり、されど其詩は、神秘縹渺として、明白なる世界觀を缺きたり。宗教と詩歌とを融合して、人生問題を解釋せんとするは、蓋しロマンティスムス派の理想なり。ノヴリスの作にて此理想を發揮したるは、小說(イ)『ハインリッヒ、フォン、オフテルディンゲン』なり。されど此作は完成せずして斷篇なり。

(2)　アウグスト、ヰルヘルム、シュレーゲル。

千七百六十七年九月八日ハノーベルに生まる。ゲッティンゲン大學に於

イ. Heinrich von Ofterdingen.
2. August Wilhelm Schlegel.
1. Friedrich Von Hardenberg. Novalis.

(上)フリードヒ、レユレーゲル　(下)ルードヰヒ、ティーク

(上)ヰルヘルム、シュレーゲル　(下)ノヴリス

て有名なる言語學者ハイネの教授を受けたり、在學中詩歌の道にて、師友と仰ぎしビュルゲルと親交を結べり。二三年の間和蘭に行き、アムステルダムに於て、家庭教師となりしが、後再びイエーナに移り、千七百九十八年以來同大學の教授となり、文學の講座を擔任したり。當時シュレーゲルは、シルレル、ゲーテを崇拜し、『ホーレン』、『ムーゼンアルマナハ』二雜誌の爲めに、大に盡力したり、後年二詩人との交情疎遠となり、弟と共同して文藝評論雜誌（ロ）『アテネウム』を發刊して、愈ロマンティスムスの旗幟を鮮明ならしめたり。千八百二年イエーナ大學を去り、伯林に行き（ハ）『美文學及び美術に關する講演』をなせり、此講演は、ヤーコブ、ミーノルによりて、出版されたり。

千八百五年に至り、シュレーゲルは、諸國漫遊の途に上り、獨逸、伊太利、丁抹を過ぎて、瑞典に至り、同國の皇太子ベルナドッテの秘書官となり、後には貴族に列せらる。此旅行中シュレーゲルは、佛公使チッケルの女にて、交際に秀でたるスタール夫人と同道したり、嘗て瑞西に在りし時は、此夫人

ロ. Athenäum.
ハ. Vorlesungen über schöne Litteratur und Kunst.

の別莊に長く逗留せしと云ふ。

シュレーゲルは、後巴里に行き、梵語を研究し、千八百十八年以後ボン大學に於て、文學及び美術史の教授となれり。千八百四十五年五月十二日在職中に死せり。

シュレーゲルは、創作家としても優ぐれ、古希の趣味を帶びたる悲劇(ニ)『イオン』を始めとし、其他作歌夥多あり。評論にては、維也納に於てなしたる(ホ)『演劇技術及び文學に關する講演』を隨一とす。

シュレーゲルの學は、折衷派に屬し、先人の說を取捨選擇するに在り、而して批評に於ては、專ら著作の特性を發揮せしめんことを努めたり。

かくシュレーゲルは、創作、批評兩方面に優ぐれしと雖も、彼が名をなせしは、飜譯に在り、實にシュレーゲルは、飜譯に就て獨特の妙技を有したり。これ固より彼の天才に負ふ所大なりと雖も、刻苦勉勵して、專心此事に從事したるによれり。西班牙の文學より、カルデロンの戲曲を飜譯し、伊太利、葡萄牙の詩歌を論じたる(ヘ)『伊太利、葡萄牙詩歌の花束』を著はし、又

ヘ. Blumenstrüsse der italienischen und portugiesischen Poesie.
ト. Indische Bibliothek.
ニ. Ion.
ホ. Vorlesungen über dramatische Kunst und Litteratur.

(ト)『印度文庫』を著はせり。されどシュレーゲルが、最も苦心したるは、シクスピア戲曲の飜譯にして、彼が獨逸文壇に貢獻したる大功は、又實に茲に存す。今日に至る迄シュレーゲルの飜譯は、改訂を加へずして、獨逸の舞臺に演ぜられて、常に好評を博せり。さきにシェークスピアを獨逸に紹介したるポーランドありしも、其譯は散文なり。詩形を原詩の儘(プランク、バース)にして、能く原意を傳へ、然かも文辭の妙味を損ぜざるは、蓋し何人もシュレーゲルの右に出づるものなからん。此點に於ては、シュレーゲル自身も大に誇りたりき。

シュレーゲルの飜譯にて、大に惜む可きは、シェークスピア全戲曲にあらずして、十六曲を以て、終はれることとなり、傑作中『ハムレット』、『ロメオ、アンド、ジュリエット』、『マーチャント、オフ、ベニス』等は、譯されしも、『マクベス』、『オセロ』、『キング、リーヤ』等は、試みられずしてやめり。シュレーゲルが譯し殘したる曲は、ティークの女ドロテーアとヲルフ、バウディッサンとが共譯したり。世人はシェエークスピアの獨逸譯に、冠するにシュレーゲル、ティーク兩人

の名を以てすと雖も、其實ティーク自身は、少しも關係せざりしなり。シュレーゲルが、廣く外國文學に通じ、飜譯の術に長じたるは、ホメール獨逸譯の金科玉條と稱せられ、何人も容喙を敢てせざりしフォッスの譯文を批評したる一事によりても明かなり。

(3) フリードリヒ、フォン、シュレーゲル。

千七百七十二年三月十日ハノーベルに生まる。ヰルヘルムの弟なり、始めは商業に從事せんとせしも、半途目的を變じて、ゲッティンゲン及び萊府兩大學に於て言語學を學び、大に濟强に拔んて希羅の文學に造詣する所漸く深くなれり。千七百九十四年始めてイエーナ大學に聘せられ、無俸給教授となり、千八百一年以後は、屢居所を轉じて、公開の講演をなせり。伯林に在る時、神學者フリードリヒ、シュライエルマッヘルと交はれり。フリードリヒも、兄ヰルヘルムと同じく、巴里に於て梵語を學び、ケルンに至り、葡敎の寺院に入りて、神秘的の研究に耽り、後墺太利に行き、公使館書記官の名譽職に就けり。千八百二十九年一月十一日ドレスデンに於て死す。

フリードリヒは、多方面なること、兄ヰルヘルムに讓らず、抒情詩、小說、劇詩に於て其詩才を揮へり。抒情詩にて『イム、スペッサルト』、『沈める城』『祈誓』『自由』、『獨逸心』等、小說にてチ『ルチンデ』、劇詩にてリ『アラルコス』は、最も著名なり。

フリードリヒは、かく創作の才を有したりと雖も、其長所は、評論なりき。墺都維也納にてなしたる講義ヌ『古代及び近世文學史』の如き、其最も顯著なるものなり。外國文學研究の結果としてル『印度言語及び才學に關して』の論文出でたり。獨逸に印度語研究の端を開きたるは、フリードリヒの功勞を多とせざるべからざるなり。

(4) ルードヰヒ、ティーク。

千七百七十三年五月三十一日首都伯林に生まる。ハルレ、エルランゲン、ゲッティンゲン等の大學に於て、近世の語學及び文學を研究せり。後ロマンティスムス派の中心たるイエーナに行き、シュレーゲル兄弟、ノヴリス、シェ

ル. Über die Sprache und Weisheit der Inder.
4. Ludwig Tieck.

チ. Lucinde.
リ. Alarkos,
ヌ. Geschichte der alten und neuen Litteratur.

リンク、ゲーテ、シルレル等と交遊せり。伊太利、佛蘭西、英吉利等へ旅行し、千八百十九年以後は、ドレスデンに在りて、宮中顧問官及び演劇監督官となれり。千八百四十一年ヰルヘルム四世の召に應じて、伯林に行き、千八百五十三年四月二十三日此地に死せり。

シュレーゲル兄弟は、創作よりは、寧ろ批評に長じたりと雖も、ティークは、批評よりも創作に於て優れたりき。

處女作(オ)『アブダラ』及び(ワ)『ヰリアム、ロヱル』は、青年時代の作なれば、未だ熟せざる所ありと雖も、後に出でし(カ)『フランツ、ステルンバルツ、ワンデルンゲン』は、前の二作に比して遙に優れたり。此作はゲーテの『ヰルヘルム、マイステル』を摸倣したるものなり。此外小說にて(ヨ)『ブラウバルト』、(タ)『デル、ゲスティーフェルテ、カーテル』、(レ)『プリンツ、ツェルビノ』等あり。劇詩にて名あるは、(ソ)『聖ゲノエーヴァの生涯』、(ツ)『オクタヴヰアヌス皇帝』、(チ)『フォルツナート』、(ナ)『シェークスピアを題目としたる詩人の生涯』及び葡萄牙詩人カモエンの最後を叙したる(ラ)『詩人の最後』等なり。就

ツ. Kaiser Oktavianus.
レ. Prinz Zerbino.
オ. Abdallah
ワ. William Lovell.
チ. Fortunat.
ソ. Leben und Tod der heiligen Genovena.
カ. Franz Sternbalds Wanderungen.
ナ. Das Dichterleben.
ヨ. Blaubart.
タ. Dergestiefelte Kater.
ラ. Der Tod des Dichters.

中後の二作は、最も著名にして、詩人の空想と實世間との衝突を巧に描きたるものなり。大作(ム)『アウフルール、イン、デン、チェベンチン』は、宗教熱の強大なる勢力を描きたるものなりと雖も、惜い哉完成せずしてやみぬ。ティークは、又飜譯家としても、敢て人後に立たず、セルバンテスの作『ドンキショーテ』を飜譯したり。

第三章　其他のロマンティスムス派の詩人。

(1)　クレメンス、ブレンターノ。

千七百七十八年九月八日コブレンツに近きタール、エーレンブライトシュタインに生まれ、千八百四十二年七月二十八日アシャフフェンブルグに死す。イエーナ大學に在る時、シュレーゲル兄弟及びティークと相知り、ハイデルベルグ大學に於てアヒム、フォン、アルニムと交はれり。ブレンターノは、抒情詩人なり、アルニムと共に俗謠集(イ)『デス、クナーベン、ウンデルホルン』を出版せり。

(2)　ルードヰヒ、アヒム、フォン、アルニム。

イ. Des Knaben Wunderhorn.
2. Ludwg Achi n von Arnim.
ム. Aufruhr in den Cevennen.
1. Clemens Brentano.

3. Joseph Von Görres.
4. Heinrich von Kleist.

ロ. Gräfin Dolores.
ハ. Die Kronenwächter.

千七百八十一年六月二十六日伯林に生まれ、千八百三十一年一月三十一日に死せり。アルニムの妻ベッチーナは、友人ブレンターノの妹にして、文才ある婦人なり、特に『ゲーテス、ブリーフエクセル、ミット、アイネム、キンデ』の著者として聞えたり。

アルニム自身も小説家にして、(ロ)『伯爵夫人ドロレス』、(ハ)『ディクロチンエヒテル』等の作あり。

(3) ヨーゼフ、フォン、ゲルレス。

千七百七十六年一月二十五日コブレンツに生まれ、千八百四十八年一月二十九日に死せり。ゲルレスは、熱心なる舊教徒にして、古南獨逸の俗謠を研究して、文學上大に貢獻する所ありたり。

(4) ハインリヒ、フォン、クライスト。

千七百七十七年十月十八日フランクフルト、アン、デル、オーデルに生まる。クライストは、多感多涙の詩人なり、自から任じて天才となし、劇詩に於てゲーテ。シルレルを凌駕せんと努めたり。されど精神狂亂して、千八百十一年十一月二十一日遂に自殺せり。

處女作悲劇(ロ)『ファミーリエ、シュロッフェンシュタイン』に於て、既に劇詩の天才を現はし、次いで喜劇(ハ)『デル、ツェルブロッヘネ、クルーグ』を出せり。クライストが、最も名をなせしは、武士氣質を寫せる(ニ)『ダス、ケートヒェン、フォン、ハイルブロン』由なり。皇帝の落胤なる少女ケートヒェンは、故ありてハイルブロンの刀鍛治の家に養はれたり、一日ケートヒェンは、エッテル、フォン、シトラール伯を見て、戀慕の情禁ずる能はざるに至れり、終に帝もケートヒェンが、己の子なることを公言し、其戀を取り持ちて、伯の夫人とならしめたり。これ一篇の筋なり。

(ホ)『ディ、ヘルマンスシュラハト』は、獨逸人がナポレオンの軍を擊退せし勝利を叙したる作にして、事最近に屬するを以て、殊更に舞臺を古代羅馬に取りしなり。

希臘神話中に題目を求めたる悲劇(ヘ)『ペンテシレーア』は、頗る殘忍の念を起さしむ。好戰女人族(アマッツォーネン)の女王ペンテシレーアは、希

ホ. Die Hermannsschlacht.
ヘ. Penthesilea.

ロ. Familie Schroffenstein.
ハ. Der Zerbrochene Krug.
ニ. Das Kätchen von Heilbronn.

ヌ. Der Zauberring.
ル. Undine.
6. Zacharias Werner.
5. Friedrich Baron de la Motte Fouqué.
ヲ. Sigurd der Schlangentöter.
ト. Prinz Friedrich von Homburg.
チ. Michael Kohlhaas.

臘の勇者中最も勇悍なりと稱せられたるアキレスを夫となさんと欲す、而してアキレスの風貌を見て、深く心を動かせり。さるに此時ペンテシレーアは、心ならずも殘忍なる本性を現はし、血に渴するの餘り、アキレスを射殺せり。されど愛人を殺しては、忽ち悔悟の念を起し、自害して死せり。戀愛と慾望、慾望の滿足と悔悟との關係は、巧に描かる。此外劇詩（ト）『プリンツ、フリードリヒ、フォン、ホムブルグ』小說（チ）『ミヒァエル、コールハース』等は、クライストの作中名あるものなり。

(5) フリードリヒ、バロン、ド、ラ、モット、フーケー。

千七百七十七年二月十二日ブランデンブルクに生まれ、千八百四十三年二月二十三日伯林に死せり。劇詩（リ）『大蛇退治者シグルド』は、作中最も文辭の秀麗を以て稱せらる。武士氣質を寫せる小說（ヌ）『デル、ツァウベルリング』、お伽噺的單稗（ル）『ウンディーネ』の二作共に名あり。抒情詩は、聲調優美にして、熱情と感想とを以てなれり。

(6) ツァハリアス、エルネル、

ソ. MeisterMartin.
ツ. Das Fräulein von Sondery.
ネ. Lebensansichten des Katers Murr.
7. Amadeus Hoffmann. Ernst Theodor Wilhelm Hoffmann.
ヨ. Phantasie Stücke.
タ. Nachstunden.
レ. Serapionsbrüder.
ヤ. Die Söhne des Thals.
ツ. Martin Luther.
カ. Der Vierundzwanzigste Januar.

千七百六十八年十一月十八日ケーニヒスベルクに生まれ、千八百二十三年一月十七日墺都維也納に死せり。エルネルは、熱心なる宗教家にして、後年は愛世を厭ひて、寺院に入り、閑散の生活を送れり。作中武士側度の滅落を叙したる（ヲ）『ディ、ゼーネ、デス、タールス、』宗教改革時代の事を寫せる（ワ）『マルティン、ルテル』及び悲劇（カ）『二月二十四日』は、名あるものなり。

(7) アマデウス、ホッフマン（實名はエルンスト、テオドール、ヰルヘルム、ホッフマンなり、されど自ら通稱して、アマデウス、ホッフマンと云へり）

千七百七十六年一月廿四日ケーニッヒスブルグに生まれ、千八百二十二年六月廿五日伯林に死せり。ホッフマンは小說家なり。（ヨ）『ファンタジー、シュチュッケ、』（タ）『ナハトスツンデン、』（レ）『セラピオンスブリューデル、』等の作あるが中に、酒樽屋の娘と職人中の三人の若者との戀愛を寫したるソ（ソ）『マイステル、マルティン、』探偵小說に似たるツ（ツ）『ダス、フロイライン、フォン、スクーデリー』等は文章奇拔にして、且つ流暢なり。自傳（ネ）『レーベン

スアンジヒテン、デス、カーテルス、ムル』は、完成せずして終はれり。

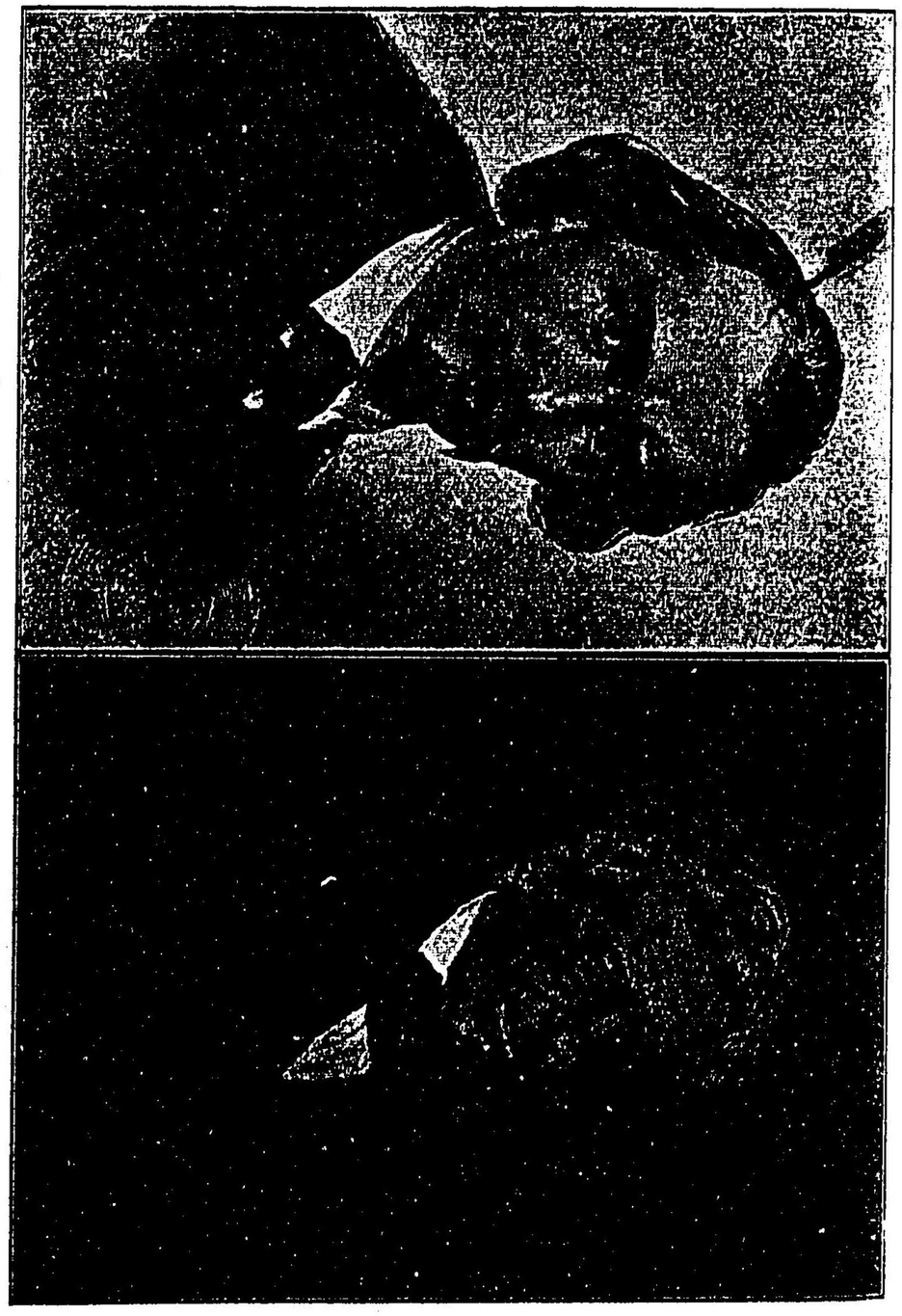
第四章　墺太利詩人。

(1)　フランツ、グリルパルツェル。

千七百九十一年一月十四日墺都維也納に生まれ、千八百七十二年一月廿一日に死す。グリルパルツェルの名が普ねく文壇に知らるゝに至りしは、劇詩『祖母』(イ)（ディ、アーンフラウ）を世に公にしたる時なり。此曲は、千八百十七年始めて維也納に興行され、爾後獨逸の各市に演ぜられたり。グリルパルツェルは、始めロマンティスムスの歩調を取りしも、一朝主義を變更して古希の思潮を追ひ、劇詩を以て他の大家と名を爭ふに至れり。『祖母』曲興行の翌年には、希臘の女詩人にて海に投じて死したるサッフォーを主人公とせる劇詩(ロ)『サッフォー』出づ。死を決するに至る迄のサッフォーの煩悶せる心情は、最も巧に寫さる。次に希臘神話に名高き勇者ヤーソンとコルチスの王女メデーアとの戀愛を叙する(ハ)『ダス、ゴルデチ、フリース』曲出づ。此曲はトリロギーなり、嘗て希詩人オィリピデスも、同

ロ. Sappho.
ハ. Das goldene Vliess.

1. Franz Grillparzer.
イ. Die Ahnfrau.



スアンジヒテン、デス、カーテルス、ムル』は、完成せずして終はれり。

第四章　墺太利詩人。

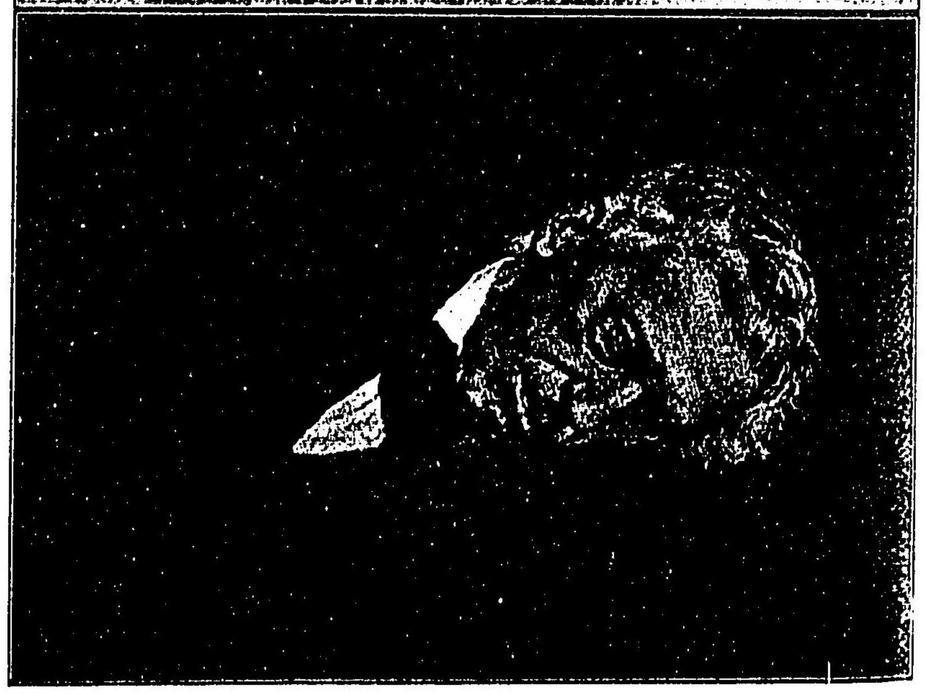
(1)　フランツ、グリルパルツェル。

千七百九十一年一月十四日墺都維也納に生まれ、千八百七十二年一月廿一日に死す。グリルパルツェルの名が普ねく文壇に知らるゝに至りしは、劇詩『祖母』(イ)（ディ、アーンフラウ）を世に公にしたる時なり。此曲は、千八百十七年始めて維也納に興行され、爾後獨逸の各市に演ぜられたり。グリルパルツェルは、始めロマンティスムスの歩調を取りしも、一朝主義を變更して古希の思潮を追ひ、劇詩を以て他の大家と名を爭ふに至れり。『祖母』曲興行の翌年には、希臘の女詩人にて海に投じて死したるサッフォーを主人公とせる劇詩(ロ)「サッフォー」出づ。死を決するに至る迄のサッフォーの煩悶せる心情は、最も巧に寫さる。次に希臘神話に名高き勇者ヤーソンとコルチスの王女メデーアとの戀愛を叙する(ハ)『ダス、ゴルデ、フリース』曲出づ。此曲はトリロヂーなり、偖て希詩人オィリピデスも、同

ロ. Sappho.
ハ. Das goldene Vliess.

イ. Franz Grillparzer.
イ. Die Ahnfrau.

ルイ　ナポレオン



ルヒチルバルリア

ホ. Ottokars Glück und Ende.
ヘ. Grillparzer als tragischer Dichter.

ニ. Des Meeres und der Liebe Wellen.

題目の下に劇詩を書き、傑作の一に數へらる。第三に著名なる曲は、レルの詩に名高き、ヘーロとレアンデルとの戀愛を叙したる『海と戀との波』(ニ)(デス、メーレス、ウント、デル、リーベ、エルレン)曲なり。ヘーロとレアンデルとは、互に戀慕するも、彼は人目を憚かりて、相會する能はず、且つ兩人はヘレスポントの海峽を隔て相住めり。レアンデルは、毎夜泳いで水を渡り、戀人ヘーロの許に通へり。ヘーロは、樓上に燈火をともして、對岸にあるレアンデルに、進路の方向を示せり。或夜風雨烈しくして燈火滅し、レアンデルは、誤つて渦流の中に入りて、溺死せり。一夜を憂と涙とに過せしヘーロは、翌曉に及んで、戀人の遺骸の浮かべるを發見し、絶望して入水し、情人の跡を追へり。この最も詩的なる物語は、グリルパルツェルの筆によりて舞臺の上の作となり、觀衆の歡迎を受くるに至れり。以上三曲は、詩材を古希の傳説に取りしものなり。本國の歴史を彼するものにては、ベーメン王オットカルの滅亡を書きたる(ホ)『オットーカルの最後』あり。美學者フォルクルトは(ヘ)『悲劇詩人としてのグリルパルツェル』

の一書を著はし、美學上よりグリルパルツェルの作を批評せり。此論文はグリルパルツェルの劇詩の眞相を窺はんには、一讀を要すべき書なり。

(2) ヨーゼフ、フライヘル、フォン、ツェードリッツ。

千七百九十年二月二十八日ヨハンニスブルグ城に生まれ、千八百六十二年三月十日維也納に死せり。ツェードリッツの詩にて、最も名あるは(ト)『夜の觀兵』(チ)『幽靈船』及び(リ)『死人の冠』等なり。

(3) ニコラウス、レーナウ。

千八百二年八月十三日匈牙利のクザタット村に生れ、千八百五十年八月二十二日維也納に近き、オーベルデーブリング癲狂院に死せり。レーナウの詩は、沈痛憂鬱の調を以て名あり。『信仰、智識、實行』『グラウベン、ヰスセン、ハンデルン』の一篇の如きは、此特徴を最も能く發揮したるものなり。歌謠にて聲調の優美を以て稱せらるゝは『春』『愛の祝ひ』『ヘルティの墓に詣でゝ』『ウルムリング禮拜堂』『郵夫の喇叭』『求婚』『海の朝』『三西印度人』等なり。此外信仰と智識との鬪爭を敘したる『ファウスト』及び千四

3. Nikolaus Lenau.
2. Joseph Freiherr von Zedlitz.
ト. Die nächtliche Heerschau.
チ. Das Geisterschiff.
リ. Totenkränze.

百九十八年法王アレキサンデル六世の下に教の爲めに殉難したる宗教改革者の歴史を題目とせる『サヴォナロラ』等頗る名あり。

(4) アナスタジウス、グリューン。

千八百六年四月十一日ライバハに生れ、千八百七十六年九月十二日グラーツに死せり。グリューンは、獨立自尊主義の人なり。此主義の最も現はれたる詩は『最後の武士』『ディ、マルティンスワンド』『指輪』『最後の詩人』等の諸篇なり。

(5) フリードリヒ、ハルム。

千八百六年四月二日クラカウに生まれ、千八百七十一年五月二十二日維也納に死せり。ハルムは、劇詩人なり。處女作劇詩(ヌ)『グリゼルディス』を始めとし、(ル)『荒野の子』(オ)『ラベンナの鬪爭者』等の曲は、作中主なるものなり。

(6) ヨハン、ヂボムーク、フォグル。

千八百二年十一月二日維也納に生まれ、千八百六十六年十一月十六

5. Friedrich Halm.
6. Johann Nepomuk Vogl.
4. Anastasius Grün.
ヌ. Griseldis.
ル. Der Sohn der Wildnis.
オ. Der Fechter von Ravenna.

7. Johann Gabriel Seidl.
8. Egon Ebert.

日に死せり。フォグルは、墺太利に於て、バラードの父と呼ばるゝ詩人なり。『見分け』、『ヘル、ハインリヒ、ザース、アム、フォーゲルヘルド』、『ワイマールの二柩』、『獨逸人』、『良響』、『グルース、アン、ダス、ファテルランド』等の名吟あり。又歌集『子供の極樂』あり。

(7) ヨハン、ガブリエル、ザイドル。

千八百四年六月廿一日維也納に生まれ、帝室金庫局長及び宮中顧問官となり、千八百七十五年七月十八日に死す。ザイドルは、抒情詩人なり。『幸福の鐘』、『貨幣僞造者』、『ハンス、オイレル』、『老フリッツの夢』、『最始及び最後の像』、『死したる兵士』等の數篇名あり。

(8) エゴン、エーベルト。

千八百一年六月五日プラーグに生まれ、千八百八十二年十月二十四日に死す。エーベルトは、劇詩よりも、寧ろ叙事詩に長じたり。『宮殿の歌人』、『索遜公爵、シュエルチング』、『ヒット夫人』、『ウーランド』、『デル、ローングレッチェル』、『ディ、マイステル』等の諸篇最も著名なり。

9. Ernst Freiherr von Feuchtersleben.
10. Adalbert Stifter.
ソ. Nachsommer.
カ. Bunte Steine.
11. Robert Hamerling.

エルンスト、フライヘル、フォン、フォイヒテルスレーベン。

千八百六年四月二十九日維也納に生まれ、千八百四十九年九月三日に死す。フォイヒテルスレーベンは、醫者にして哲學を好み、又詩才に長じたり。ロマンティスムスよりは、グラシチスムスの主義に傾き、古希の思潮を慕へり。

(10) アダルベルト、スティフテル。

千八百六年十月二十三日オーベルプラーンに生まれ、千八百六十八年一月二十八日レンツに死せり。スティフテルの文は、輕快なり、自然の景に對して、情を抒べ、人生と自然との關係を叙するに於て、最も妙を得たり。

『晩夏』(ソ)『ナハゾムメル』、『彩石』(カ)(ブンテ、シュタイネ)の二作の如き、行文平易にして、然かも自ら詩趣哲理を含む、散文として、獨逸文の模範たるべきものなり。

(11) ロベルト、ハーメルリング。

千八百三十年三月二十四日下墺太利のキルヒベルグに生まれ、千八百八十九年七月十三日グラーツに死す。パーメルリングは、叙事詩人なり。『アハスフェール、イン、ローム』、『シオンの王』の二篇は、共に華美の文辭を以て成り、作中最も著名なり。悲劇(ヨ)『ダントン、ウンド、ロベスピール』は、名は劇詩なりと雖も、實は悲劇的叙事詩なり、人物の性格は巧に描かる。此外(タ)『アモール、ウント、プシヒェ』(レ)『ホムンクルス』の二篇あり、自傳(ソ)『スタティオン、マイネル、レーベンスビルゲルシャフト』又著名なり。

(12) ヘルマン、フォン、ギルム。

千八百十二年十一月一日インスブルックに生まれ、千八百六十四年五月三十一日リンツに死す。ギルムは、多感なる抒情詩人なり。

(13) フェルディナント、フォン、ザール。

千八百三十三年九月三十日維也納に生まる。小說(ツ)『インノッツェンツ』(ナ)『皇帝ハインリヒ』(ラ)『タッシロ』等の作あり。

(14) アドルフ、ピヒレル。

(チ)『コステニッツ城』劇詩(ナ)

ナ. Kaiser Heinrich.
ラ. Thassilo.
14. Adolf Pichler.
12. Hermann von Gilm.
13. Ferdinant von Saar.
ツ. Innocenz.
チ. Schloss Kostenitz.
ヨ. Danton und Robespierre.
タ. Amor und Psyche.
レ. Homunkulus.
ソ Stationen meiner Lebenspilgerschaft.

千八百十九年九月四日クレフシュタインに近かきエルに生まれ、千八百六十七年インスブルックに於て地質學の教授となり、千九百年十一月十五日に死す。ピヒレルは、叙事詩、抒情詩雙方に秀て且つ劇詩をも書けり。二劇詩(ム)『ディ、タルクイニール』、(ウ)『ロドリゴ』、(百傳(ヰ)『ツー、マイネル、ツァイト』等文辭頗る巧なり。『ヒムネン』、『シュベートフリュヒテ』、『フラゼラフィコ』、『マルクシュタイネ』、『ノイエ、マルクシュタイネ』、『ヨッホラウテン』、『レッテ、アルペンローゼン』、『クロイツ、ウンド、クエール』等の數篇の詩は、著名なるものなり。

(15) ペーテル、ローゼッゲル。

千八百四十三年七月三十一日スタイエルマルクのアルプルに生まる。ローゼッゲルは、墺太利の田園生活を寫すに巧にして、通俗詩人として名あり。『森の故郷』、『森の學校長』、『ヤーコップ、デル、レッテ』、『ペーテル、マイル』等の作あり。

(16) ルード(ヰ)ヒ、アンツェングルーベル。

15. Peter Rosegger.
16. Ludwig Anzengruber.
ム. Die Tarquinier.
ウ. Rodrigo.
ヰ. Zu meiner Zeit.

千八百三十九年十一月二十九日維也納に生まれ、千八百八十九年十二月十九日に死す。アンツェングルーベルは、通俗物語及農民劇詩の作者として名あり。

第五章　ロマンティスムス派の後繼者及び對立せる一派。

(1)　エルンスト、シュルツェ。

千七百八十九年三月二十二日ツェルレに生まれ、千八百十七年六月二十六日に死す。シュルツェの詩は、聲調の美、韻律の妙を以て稱せらる。叙事詩（イ）『チェチーリエ』及び小說的叙事詩（ロ）『ディ・ベツァウベルテ、ローゼ』の二作は、最も名あり。

(2)　アダルベルト、フォン、シャミッソー。

千七百八十一年一月三十日佛國シャムパーニュのボンクール城に生まれ、千八百三十八年八月二十一日獨逸國の首都伯林に死す。シャミッソーは其名によりても、知らるゝ如く、萊因河南の產なりしと雖も、幼より獨逸

1. Ernst Schulze.
イ・Cäcilie.
ロ. Die bezauberte Rose.
2. Adalbert von Chamisso.

(上)リュツケルト　(上)イムメルマン
(下)シャミッソー　(下)ウーランド

1. Ernst Schulze.
イ・Cäcilie.
ロ. Die bezauberte Rose.
2. Adalbert von Chamisso.

千八百三十九年十一月二十九日維也納に生まれ、千八百八十九年十二月十九日に死す。アンツェングルーベルは、通俗物語及農民劇詩の作者として名あり。

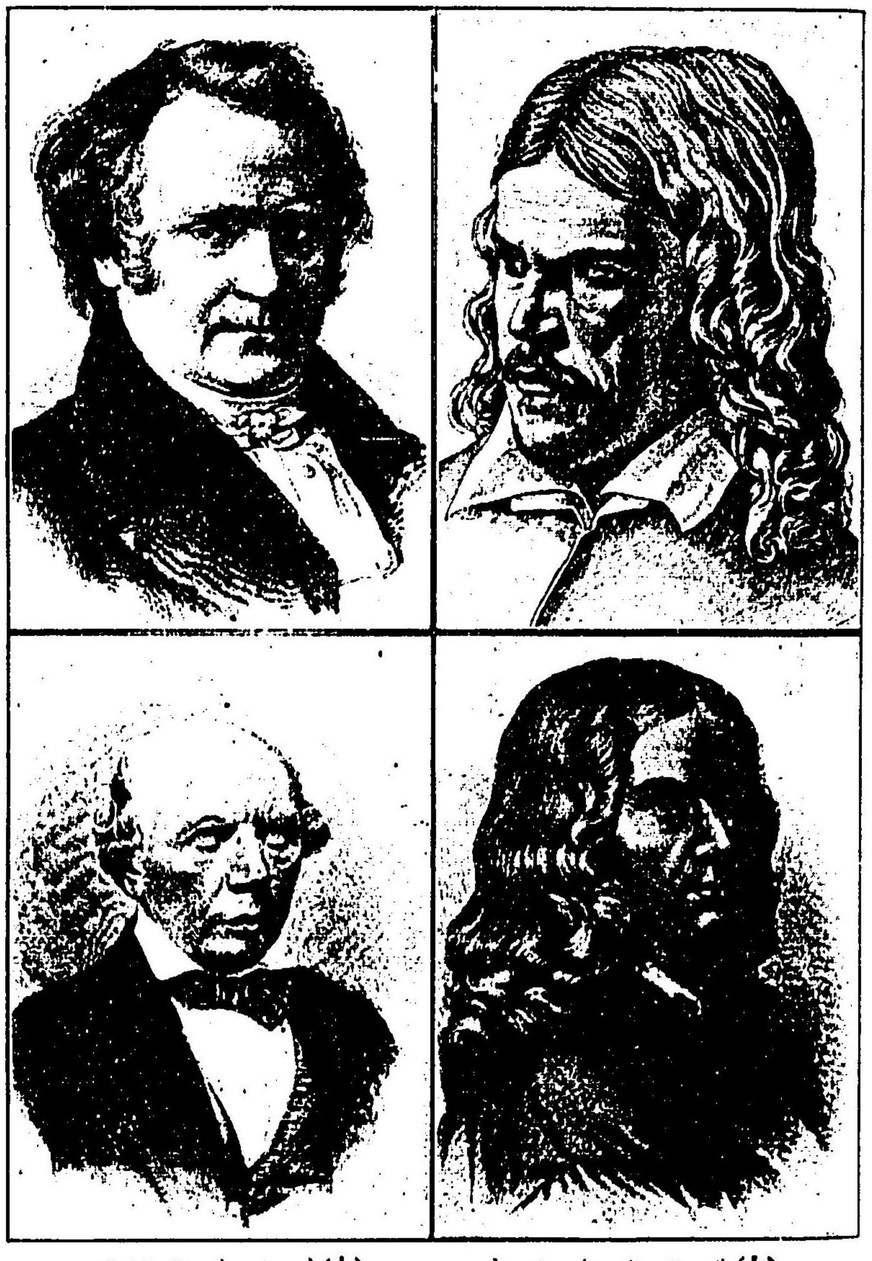
第五章　ロマンティスムス派の後繼者及び對立せる一派。

(1)　エルンスト、シュルツェ。

千七百八十九年三月二十二日ツェルレに生まれ、千八百十七年六月二十六日に死す。シュルツェの詩は、聲調の美、韻律の妙を以て稱せらる。叙事詩（イ）『チェチーリエ』及び小說的叙事詩（ロ）『ディ、ベツァウベルテ、ローゼ』の二作は、最も名あり。

(2)　アダルベルト、フォン、シャミッソー。

千七百八十一年一月三十日佛國シャムパーニュのボンクール城に生まれ、千八百三十八年八月二十一日獨逸國の首都伯林に死す。シャミッソーは其名によりても、知らるゝ如く、萊因河南の產なりしと雖も、幼より獨逸



(上)リユツケルト　(上)イムメルマン
(下)シヤミツソー　(下)ウーランド

ハ. Peter Schlemihl.

に入りて、言語、思想共に北方の感化を受け、詩才を隣國の文學に揮へり。青年の頃は、ロマンティスムス派に入りしも、後年悟る所あつて、其主義を變更したり。されば、シャミッソーも、始めは獨逸中古の文學を崇拜し、ハルトマン、フォン、アウエの作『デル、アルメ、ハインリヒ』を愛讀したり。この中古文學崇拜時代になりし作ハ『ペーテル、シュレミール』は、滑稽的のお伽噺にして、ペーテルとは、作の主人公の名なり。或處に名をペーテルと呼ぶ貧しき人あり。一日惡魔に欺かれて、自分の影を巨萬の富と交換したり。ペーテルは、俄に富を得て大に喜び、人に示して誇らんとせしも、影なきの故を以て、人中に行く毎に、衆人の侮辱を蒙れり。かゝれば、ペーテルは、富を得ながらも人と交はる能はず、已むなく孤獨の生活を送れり。ペーテルは、日夜影を取り返へさんと苦心せしが、終に能はず、されど其代りに『七哩の長靴』を得たり。依てペーテルは、意を決し、人の社會を去つて、獨り自然を友として世を送れり。これ詩人が故國を去つて、他鄉に孤客となりし感慨の寓意に外ならざるなり。

此外シャミッソーの詩にて、名あるものを擧ぐれば『フラウエンリーベ、ウント、レーベン、』『フリッシュ、ゲズンゲン、』『ディ、アルテ、ワッシュフラウ、』『トラギッシェー、ゲシヒテ、』『デル、レヒテ、バルビール』等あり。されどシャミッソーの作にて、最も名を知られたるは、詩的の物語(ニ)『ザラス、イ、ゴメス』なり。此物語は、頗る悲哀の境遇を叙するものにして、自然の叙景人情の描寫共に巧妙なり。

一青年あり、南海に航して乘船難破し、洋中の一孤島に五十の星霜を送り、日々巖頭に立ちて、大船の過ぐるを望見す。然るに運命の神は、遂に此青年を救はずして、空しく餓死せしむと云ふは、一篇の梗概なり。尙シャミッソーの詩は、數へ來れば、名吟多しと雖も、茲に之を略せん。

(3) ヨーゼフ、フライヘル、フォン、アイヒェンドルフ。

千七百八十八年三月十日シュレージエンのルボヰッ城に生まれ、千八百五十七年十一月二十六日ナイセに死す。アイヒェンドルフは、中古文學崇拜主義の人なり。短篇小說『無性者の生活』(ホ)(アウス、デム、レーベン、アイチス、タウゲニヒツ)及び詩『愛兒の死を悼みて』二篇は、ロマンティスムス主義を最もよく發揮せるものなり。此外アイヒェンドルフの詩歌には、吟誦す可きもの甚だ多し。

(4) ヰルヘルム、ミュルレル。

千七百十四年十月七日デッサウに生まれ、千八百二十七年十月一日に死す。『ダス、フリューリングスマール、』『フリューリングスアインツーグ』等の詩は、聲調輕妙を以て稱せらる。此外『ブレスラウの鑄鐘』(グロッケングース、ツー、ブレスラウ)『エスト、エスト、』『デル、エーヰゲ、ユーデ、』『アレキサンデル、イプシランティ、』『デル、クライヒ、ヒドリオート、』『デイ、レッテン、グリーヒェン』等の名篇あり。

(5) カール、レーベレヒト、イムメルマン。

千七百九十六年四月二十四日マグデブルグに生まれ、千八百四十年八月二十五日ディユスセルドルフに死す。劇詩(ヘ)『ダス、ダール、フォン、ロンセヴル』(ト)『ケーニッヒ、ペリアンデル、ウント、ザイン、ハウス』(チ)『カルデニオ、ウント、セリンデ』

1. Joseph Freiherr von Eichendorf.
ホ. Aus dem Leben eines Taugenichts.
ニ. Salas y Gomez.

5. Karl Leberecht Immermann.
ヘ. Das Thal von Ronceval.
ト. König Periander und sein Haus.
チ. Cardenio und Celinde.

4. Wilhelm Müller.

ヨ. Der gläserne Pantoffel.
タ. Schatz des Rhampsinit.
レ. Die Verhängnisvolle Gabel.
ソ. Der romantische Ödipus.
ツ. Münchhausen.
カ. Merlin.
6. August Graf von Platen.
ヲ. Trauerspiel in Tirol.
ヌ. Kaiser Friedrich II.
ル. Tristan und Isolde.
ヤ. Die Epigonen.

オ、ウント、チェリンデ』等は、初期の作にして、後年史劇（リ）『ティロルの悲劇』（ヌ）『フリードリヒ二世皇帝』等を書けり。叙事詩（ル）『トリスタン、ウント、イゾルデ』、小説（オ）『ディ、エピゴーネン』、『勇者物語詩』『ツリンゲント、ヘン』等も名あり。就中最も名あるは小説（ワ）『ミュンヒハウゼン』及びゲーテのファウストに倣ひたる神秘的劇詩（カ）『メルリン』なり。

(6) アウグスト、グラーフ、フォン、プラーテン。

千七百九十六年十月二十四日アンスバハに生れ、千八百三十五年十二月五日シラクースに死す。プラーテンは、頓才奇智に富み、奇警の句屢人を驚かせり。プラーテンは、處女作の劇詩（ヨ）『デル、グレーゼルネ、パントッフェル』に於ては、ロマンティスムスの主義を奉ぜしと雖も、（タ）『シャツ、デス、ラムプシニート』曲に於ては、既に此主義を守らざるに至れり。

プラーテンは、諷刺的の喜劇に長ぜしを以て、獨逸のアリストファネスの名を負へり、中にもミュルヒルを嘲りたる（レ）『ディ、フェルヘングニスフォルレ、ガーベル』及びイムメルマンを罵りたる（ソ）『デル、ロマンティッシェ、エディプス』の二作は、アリストファネスなる名を恥かしめずと謂ふべし。

プラーテンは、古代の無韻の句を用ゐて、詩形の改善を計りたり。プラーテンの詩にて、最も名高きは、バラードにて、『デル、ビルグリム、フォン、サンクト、ユスト』及び『ダス、グラブ、イム、プゼントー』の二篇、叙事詩にて、『ディ、アバシーデン』なり。各篇共に音調優麗人をして、嘆賞措く能はざらしむ。

7. Johann Gottfried Seume.
ツ. Mein Leben.
8. Heinrich Heine.

(7) ヨハン、ゴットフリード、ゾイメ。

千七百六十三年一月二十九日ワイセンフェルスに近き、ポゼルナに生まれ、千八百十年六月十三日テープリッツに死す。『シラクースへの散歩』『千八百五年の夏』の二作と、自傳（ツ）『マイン、レーベン』は、ゾイメの詩才を窺ふに足るなり。

(8) ハインリヒ、ハイネ。

千七百九十九年十二月十三日ディユッセルドルフに生まれ、千八百五十六年二月十七日非常の苦悶を以て佛京巴里に死せり。

ハイネの双親は猶太人なり。ハイネは、始めボン大學に遊び、後ゲッティ

ンゲン大學に轉じたり、されどゲッティンゲンの地、意に滿たずして、學を廢し、諸國を巡遊し、名山に上ぼり、大河を涉り、自然の景勝を探ぐれり。或時は伯林に行き、又或時はハムブルグに赴き、千八百三十一年以後は巴里に轉住したり。

ハイネは、ロマンティスムス主義の盛なる鼓吹者なり。悲劇數篇皆此主義を發揮せり。されどハイネの本領は、悲劇よりは、抒情詩及び紀行文に在り。『紀行文』(チ)(ライゼビルデル)中の諸篇は、諷刺的にして、奇語、警句人の肺腑を貫き、然かも行文勇健にして流麗なり。ハイネの奇才を窺はんと欲せば、先づ紀行文として、最も廣く歡迎されし『ハルツ山紀行』(ナ)(ハルツライゼ)の開卷數行を讀む可し。讀者は、先づゲッティンゲンに別を告ぐる詩に於て、貴女の華美、虛飾にして、眞實なきを嘲罵したるに一驚を喫し、ゲッティンゲンを鵠詰と大學とを以て有名なりと罵れるに至つて、啞然たらざるを得ざる可し。其他作中に現はるゝ人物は、村嬢となく、田夫となく、痛罵冷評の題目とならざるはなし。

チ. Reisebilder.
ナ. Harzreise.

紀行文に於て漫罵、酷評をなせるハイネは、抒情詩に於て、錦腸の奥底を絞り出し、句々金玉の響あり、篇々熱涙を以て溢る。詩集(ラ)『ブーフ、デル、リーデル』(ム)『ノイエ、ゲディヒテ』及び(ウ)『ロマンチェロ』の三卷あり。孰れも情緒を抒ぶること、濃かにして、聲調優美なり。されど文辭の奇矯を好むは、ハイネの缺點にして、詩的のものを、滑稽的ならしめたりとの非難を免かれざるなり。

ラ. Buch der Lieder.
ム. Neue Gedichte.
ウ. Romanzero.

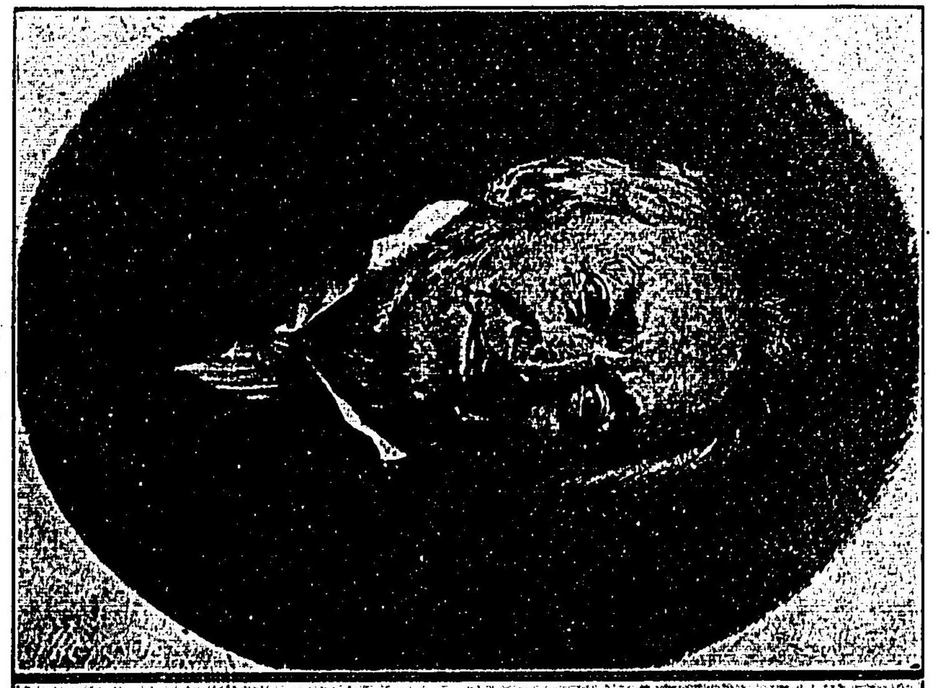
第六章　自由戰爭時代の詩人。

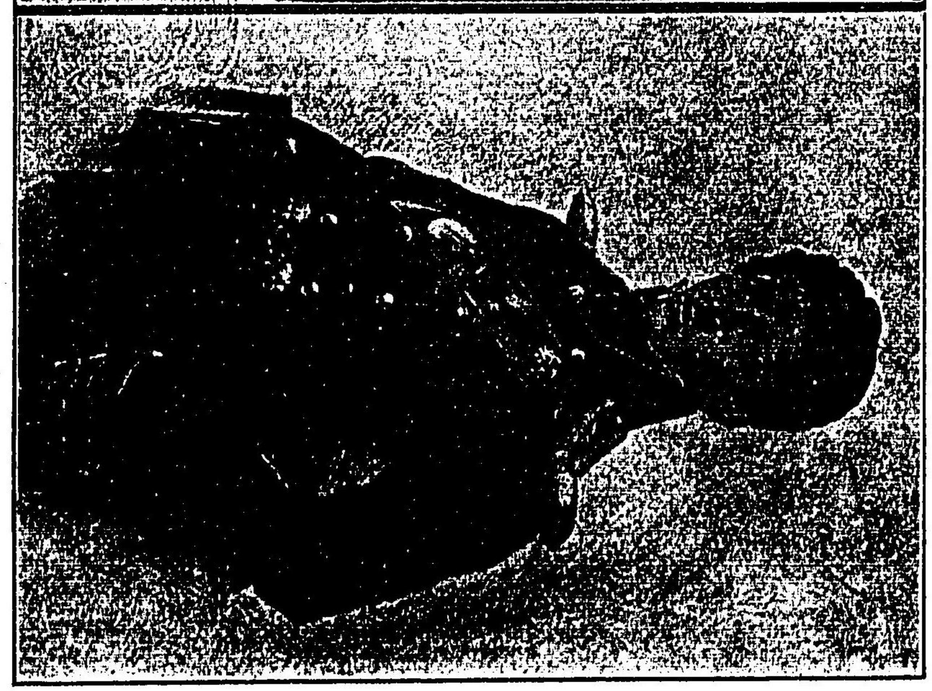
千八百十三年英、露、普、墺仝盟軍は、モスコーに不意を打たれし奈波烈翁の軍を萊府に敗れり。奈翁の壓抑に苦しみ自由を渴望せる獨逸國民中愛國詩人の蹶出したる、蓋し偶然にあらざるなり。獨逸文學史上此節の詩人を稱して、自由戰爭時代の詩人と云ふ。

(1)　エルンスト、モーリッツ、アルント。

千七百六十九年十二月二十六日リューゲン島のシーリッツ村に生まる。當時此島は、瑞典に屬したり。アルントの曾祖父は、瑞典の下士官にして、

1. Ernst Moritz Arndt.





祖父は牧人なり、而して父は、久しく或伯爵に隷屬し、後に自由の民となりしと云ふを以て見れば、アルントは、名門の子にあらざるなり、父は勤勉の人にして、日々勞役に服し、アルントも、共に東海の多趣多樣なる風光を賞しつゝ父を扶けて働けり、母は父と少しく性質を異にし、神を敬愛するの念深くして、アルントに神の事を語り、歌を敎へ、又時としてお伽噺に少年の心を慰めたり。かくしてアルントは、心身共に健全にして、千七百九十一年には、ストラールズントの高等學校を終へて、グライフスワルト大學に入れり。後イエーナ大學に轉じ、フィヒテの學風を慕ひ、留まること三年、神學及び哲學の研究をなせり。後數年鄕里にて、家庭敎師となりしが、諸國周遊を思ひ立ち、獨逸、瑞西、匈牙利、上伊太利及び佛蘭西等へ旅行せり。アルントは、ポムメルンに歸るや、グライフスワルド大學より、歴史の講義を囑托され、千八百五年に至りて、敎授となれり。翌千八百六年には、奈翁の暴横を憤り、本國の屈辱を慨して、獨立自由を唱へたる一作（イ）「時代の精神」を出せり。此書は忽ち獨逸人中に傳はり、大に敵

イ. Geist der Zeit.

トマス

ルキヤク

イ. Geist der Zeit.

祖父は牧人なり、而して父は、久しく或伯爵に隷屬し、後に自由の民となりしと云ふを以て見れば、アルントは、名門の子にあらざるなり。父は勤勉の人にして、日々勞役に服し、アルントも、共に東海の多趣多樣なる風光を賞しつゝ父を扶けて働けり。母は父と少しく性質を異にし、神を敬愛するの念深くして、アルントに神の事を語り、歌を教へ、又時としてお伽噺に少年の心を慰めたり。かくしてアルントは、心身共に健全にして、千七百九十一年には、ストラールズントの高等學校を終へて、グライフスワルト大學に入れり。後イエーナ大學に轉じ、フィヒテの學風を慕ひ、留まること三年、神學及び哲學の研究をなせり。後數年鄉里にて、家庭教師となりしが、諸國周遊を思ひ立ち、獨逸、瑞西、匈牙利、上伊太利及び佛蘭西等へ旅行せり。アルントは、ボムメルンに歸るや、グライフスワルド大學より、歴史の講義を囑托され、千八百五年に至りて、教授となれり。翌千八百六年には、奈翁の暴横を憤り、本國の屈辱を慨して、獨立自由を唱へたる一作（イ）『時代の精神』を出せり。此書は忽ち獨逸人中に傳はり、大に敵

凜心を皷吹したり。されど壯快の文を以て、獨立自由の精神を煽動せしゝ爲め、敵國の探偵嚴にして、本國にては、身命の安全保し難くなり、アルントは、逃げて瑞典王グスターフ四世の許に隱れて、數年を送れり。千八百九年に至り再び歸り來りしも、國狀は依然として擾亂せり。此年勇將フェルディナンド、フォン、シルは、ストラールズントに於て、果敢なき最後を遂げたり。此時戰死を弔へる詩『シルの歌』成れり。捕吏の探索に追窮され、アルントは、幼時の友にて伯林の一書肆の主人ゲオルグ、ライメルの許に、晤學教師アルマンと變名して隱れ居たり。千八百十年アルントは、再びグライフスワルドに赴きしも、留ること年餘にして此地を去りたり。千八百十二年佛軍ポムメルンを占領せしかば、アルントは、逃げてプレスラウに行き、普魯西亞の名士シャルンホルスト、グナイゼナウ及びブリュッヒェル等に會合したり。同年の夏奈翁は、大軍を率ゐて、モスコーに向つて進軍し、佛軍の過ぐる所敵なく、普魯西亞軍も、征服者の旗下に命を待たざるを得ざるに至れり。茲に於てアルントは、シュレージエンを去つて、聖彼

第四編　新南獨逸時代の文學（宗教改革より現代迄。）
（クラシチスムス及びロマンティスムス。千七百四十八年より千八百四十八年迄。）○ロマンティスムス。　第六章　白山戰爭時代の詩人。

得堡に行き、露政府と國事を談じつゝある宰相シュタインを訪ひて秘書官となれり。露都に在る間も、アルントは文筆を斷たず(ロ)『獨逸武士の教訓』の一書を公にし、獨逸に於て數千卷を出版したり。

千八百十三年モスコーの大火、佛軍を驚かし、北方の嚴冬、奈翁の膽を寒からしめしかば、アルントは、シュタインに從ひて急ぎ獨逸に歸れり。此時ヰルヘルム三世は、盛に國民軍を募集しつゝあるの時なりき。アルントは、則ち(ハ)『國民軍とは何ぞや』(ニ)『萊因は獨逸の大河なり、されど獨逸の境界に非ず』の二書を著はせり。

アルントは、自から劍を持して、戰場に立たざりしも、筆を執りて、盛に青年の意氣を鼓舞したり。(ホ)『護國歌集』は、アルントの作中最も廣く獨逸國内に傳はれり。

戰爭後アルントは、かの有名なる神學者シュライエルマッヘルの妹と結婚したり。アルントは、性來世を憂ひ、時を慨く流の人にして、心常に快々として樂まず、晩年は世と遠ざかり、閑散の生活を送りたり。千八百五十

ロ. Katechismus für den deutschen Kriegsund Wehrmann.
ハ. Was bedeutet Landsturm und Landwehr.
ニ. Der Rhein Deutschlands Strom, nicht Deutschlands Grenze.
ホ. Kriegs und Wehrlieder.

九年十二月二十六日九十歳の高齡に達して國人の祝賀を受け、翌年一月二十九日ボンに於て死せり。千八百六十五年獨逸人は、萊因河南に紀念碑を建てゝ、愛國詩人の名譽を悠久ならしめたり。

(2) テオドール、ケルチル。

千七百九十一年九月二十三日ドレスデンに生まる。シルレルの親友として名高きケルチルは、則ち詩人の父なり。ゲーテ、シルレルは、屢ケルチルの家に會談せしかば、二大詩聖の感化は、知らず〳〵幼兒テオドールに及べり。テオドールは、ドレスデン私塾に學びて後、十七歳の時フライベルグの鑛山專門學校に入り、鑛山監督官エルチルの知遇を得たり。千八百十年更に高等の學術を學ばんとして、萊府に赴き、翌年伯林に行きしも、留まること僅かに三ヶ月にして、保養の爲め、カルヽス溫泉に赴けり。此年の秋に至り、テオドールは、維也納に赴き、ヰルヘルム、フォン、フムボルト及びフリードリヒ、フォン、シュレーゲルと交遊して教を受けしこと多かりき。

テオドールの天賦の詩才は、先づ劇詩に現はれたり、而して、喜劇はコッツェブーを祖述し、悲劇は、シルレルを模範としたり。喜劇にて名あるは（ヘ）『デル、ナハトエヒテル』（ト）『デル、グリューネ、ドミノ』（チ）『デル、フェッテル、アウス、ブレメン』等にして、（リ）『ツリーニ』（ヌ）『ロサムンデ』等は、悲劇の名作なり。詩にては『ハルラス、デル、キューネ、シュプリンゲル』『シュラハト、バイ、アスペルン』等あり。

テオドールは、千八百十三年三月父の許可を得て、維也納を去り、プレスラウに行き、少佐フォン、リュツォーの義勇軍に投じ、軍營に在りて、詩を賦し、軍氣を鼓舞したり、萊府の近村キッツェンに在る時、休戰中佛軍の襲撃を受け重傷を負へり、されど幸ひに友人に助けられて平癒せり。此時『劍の歌』なれり。一たびは、辛くも身命を全うしたるテオドールは、少しも恐怖の念なく、再び戰場に赴きしが、敵彈に胸を貫かれ千八百十三年八月二十六日勇ましき戰死を遂げたり。遺骸將に葬られんとする時、リュツォー部下の兵士は、詩人の作歌『戰爭中の祈願』を歌ひて、勇士の靈を吊へ

ヘ. Der Nachtwächter.
ト. Der grüne Domino.
チ. Der Vetter aus Bremen.
リ. Zriny.
ヌ. Rosamunde.

り。テオドールの戰歌（ル）『ライエル、ウント、シュエルト』は、死後に出版されたり。

（3）マックス、フォン、シェンケンドルフ。

千七百八十三年十二月十一日ティルジットに生まる。シェンケンドルフも、亦愛國詩人なり。千八百十三年佛軍の襲來するや、右手は、病の爲め自由ならざりしも、砲煙彈雨を座視するに忍びず、劍を提げて、露普連合軍に加はり、萊府の戰に臨めり。戰亂平定の後シェンケンドルフは、コブレンツに於て、政府の顧問となり。翌千八百十七年十二月十七日に死せり。シェンケンドルフの歌は、人心を勵ますこと、アルント、ゲルチルの如くならざりしも、戰歌の作少ならず、『國民軍の歌』『兵士の朝歌』『自由の歌』『萊因河の歌』『獨逸諸市』等最も名あるものなり。

（4）フリードリヒ、リュッケルト。

千七百八十八年五月十六日シュワインフルトに生まる。リュッケルトは、幼時より屢居所を變へ、各地に遊びたり、始め鄕里の高等學校に入りて

ル. Leier und Schwert.
3. Max von Schenkendorf.
4. Friedrich Rückert.

修業し、後キュルツブルグ大學に遊び、法律を學びしが直に語學を研究するに至れり。千八百十一年イエーナ大學に於て、學位の試驗に及第し、講座に立つに至れり。千八百十七年伊太利に行き、羅馬に一冬を過せり。此旅行後リュッケルトは、東洋の學術を研究したり。

千八百二十六年ルードヰヒ一世は、リュッケルトを、エルランゲン大學に招きて、東洋語の教授とならしめたり。千八百四十一年伯林大學に轉任し、後七年を經て、教授の職を辭し、田舍の別莊に退きて、閑散の身となり、千八百六十六年一月三十一日に死す。

自由戰爭時代の詩人中異彩を放てるものは、リュッケルトなり。アルント、ゲルヲル、シェンケンドルフは、戰歌以外に、韻律を用ゐることを知らざりしに非らずと雖も、其名今日に稱せらるゝ所以は、一に愛國の精神を歌ひたるによれり。リュッケルトに至りては、然らず、抒情詩、叙事詩及び劇詩の三方面何れにも秀でたり。依て戰爭歌以外に於て、優に詩人の地位を保てり。

先づ戰爭歌にては、敵愾心を以て充ちたる『ディ、ゲハルニッシュテン、ソヲッテ、』『薬府の戰、』『時の花冠、』『バルバロッサ、』『オッテンゼンの墳墓』等なり。

リュッケルトの作歌中最も其名を知らるゝは、歌集『愛の春』(オ)(リーベスフリューリング)なり。集中載する所、幾百篇恰も百花芳を競ふ春野を過ぐるが如く、彩蝶花に眠り、美禽玉音を弄するの觀あり。『夕暮の歌』『青年』『裘める花』等又句々珠玉なり。抒情詩にて、宗教趣味を帶ぶるものは『ベトレヘム』及び『ゴルガータ』等なり。

叙事詩にては、古代の勇者物語を改作したる『キント、ホルン』を始めとし、波斯の詩聖フィルドウージーの『シャハナーメ』より材を取れる(ワ)『ロステム、ウント、スフラブ、』あり。而して叙事詩の白眉と稱せらるゝは(カ)『ナル、ウント、ダマヤンティ』なり。此詩は、印度の古詩として名高き叙事詩『マハバラタ』に想を取りしものなり。

リュッケルトが、詩材を求むること、かくの如く多方面なりしは、廣く世界各國の文學を研究せしによれり。此點に於てリュッケルトは、頗るヘル

ワ. Rostem und Suhrab.
カ. Nal und Damajanti.
オ. Liebesfrühling.

デルと考を同うせり。

リュッケルトは、詩材を求むること廣かりし如く、多樣なる外國詩形を用ゐたり。獨逸詩人中かく多くの詩形を用ゐしは、キルヘルム、シュレーグル及びプラーテンを除いては、多く其比を見ざるなり。

非凡なる語學の才を有せしリュッケルトは、支那の詩歌を摸倣して『シーキン』(詩經)を翻し、亞剌比亞詩人ハリヽの作『マカーメン』を譯したり。

リュッケルトの詩に於て白璧の微瑕とも云ふべきは、萬物を悉く詩題たらしめんとして、內容、詩形と相應ぜざるにあり。劇詩は、リュッケルトの最も不得意とする所なりしと雖も、『ヘロデス、デル、グローセ』、『ザウル、ウント、ダビッド』等の數曲あり。

第七章　シュワーブ派詩人。

(1)　ルード井ヒ、ウーランド。

千七百八十七年四月二十六日チューピンゲンに生まれ、千八百六十二年十一月十三日故郷に死す。

イ. Ernst, Herzog von Schwaben.
ロ. Ludwig der Bayer.
ハ. Des Sängers Fluch.

ウーランドは、劇詩をも作れり。(イ)『エルンスト、ヘルツォグ、フォン、シュワーベン』、(ロ)『ルード井ヒ、デル、バイエル』二曲の如きは、其著名なるものなり。されど其最も長じたるは、歌謠及びバラードなり。バラードにて、『樂人の呪』(ハ)(デス、ゼンゲルス、フルフ)の一篇は、ウーランドの作中秀絕と稱せらる。昔者師曠の琴を援りて、清商を皷するや、玄鶴舞ひ、清角を皷するや、玄雲起る。水上琵琶の聲を聞いて泣く者、豈獨り江州の司馬のみならんや、音律の妙に感じては、行く雲も停り、梁上の塵も自ら動き、涙あるものは泣かざる能はざるなり。音樂の美も、茲に至りて蓋し至極に達せりと云ふ可し。然れども白髮の樂人が、帝王の暴橫を憤り、怨恨の一念凝て琴を城門に投ずるや、金殿玉樓忽焉として地に委するに至つては、音律は、將に優美の域を超脫して、悲壯となれり。ウーランドは、實に此篇に於て、音樂が人寰以上の消息たる事を說けり。次て『ベルトラン、デ、ボルン』、『盲王』、『タイエフェル』、『シュエービッシェー、クンデ』、『小ローランド』、『カール王の舟行』等の諸篇皆名あり。

ウーランドは、單に詩人に非ずして、又評論家なり。(ニ)『獨逸詩歌及び物語史』の著は、學術界に貢獻する所大なりと云ふ可し。

(2) グスターヴ、シュワープ。

千七百九十二年六月十九日スツットガルトに生まれ、千八百五十年十一月四日に死す。シュワーヴは、自から任じて、ウーランドの高弟となせしも、詩才遙かに師に及ばざりき。『暴風雨』『デル、ライテル、ヴント、ボーデンゼー』『ヨハンネス、カント』『ハイデルベルグの饗宴』等の諸篇名あるもの多し。

(3) ユスティーヌス、ケルネル。

千七百八十六年九月十八日ルードヴヒスブルグに生まれ、千八百六十二年二月二十一日ワインスベルグに死す。ケルネルは、チユビンゲン大學に在學中ウーランドと相識れり。作中バラードにて著名なるものは『デル、ライヒステ、ヴィユルスト』『カイゼル、ルードルフス、リット、ツーム、グラーベ』『デル、ガイゲル、ツー、グミュンド』『ブライス、デル、タンネ』『デル、ワンドレル、アン、デル、ゼーゲミューレ』『シュエービッシェー、ディヒテル、シューレ』等なり。

シュワープ詩人は、文學史上一の派をなすが如しと雖も、一派を通じて、同一の主義を有するものに非らず。若し有りとせば、シュワープの山川の美を愛するに在りと云ふ可し。ケルネルのホ(ホ)『シュエービッシェー、ディヒテルシューレ』は、此意を歌へるなり。

ケルネルは、性質溫良にして、衆人の敬愛を受け、客を遇すること、鄭重にして、客室日々談笑の聲を絶たざりき。ケルネルは、又好んで幽靈の事を研究し、之に關する書へ『ディ、ゼーヘリン、フォ、プレヴォルスト』を著はせり。

(4) エドアルド、モーリケ。

千八百四年九月八日ルードヴヒスブルグに生まれ、千八百七十五年六月四日スツットガルトに死せり。モーリケは、最も抒情詩に長じたり。『シェーン、ロートラウト』『ディ、シェーネ、ブーヘ』等は、就中著名なり。小説の名作

3. Justinus Kerner.

ニ. Schriften zur Geschichte der deutschen Dichtung und Sage.
2. Gustav Schwab.

ホ. Schwäbische Dichterschule.
ヘ. Die Scherin von Prevorst.
4. Eduard Mörike.

ル. Jud Süss. ヌ. Die Sängerin. 5. Wilhelm Hauff. ト. Maler Nolten.
チ. Memoiren des Satan. チ. Mozart auf der Reise nach Prag.
ソ. Phantasieen im Bremer Ratskeller. リ. Idylle vom Bodensee.

は、(ト)『マーレル、ノルテン』(チ)『モツァルト、アウフ、デル、ライゼ、ナハ、プラグ』及び(リ)『イディルレ、フォム、ボーデンゼー』等なり。

(5) ヰルヘルム、ハウフ、

千八百二年十一月二十九日スツットガルトに生まれ、千八百二十七年十一月十八日に死す。ハウフは、お伽噺及び小說に、最も名を得たり。英のスコットの文辭を喜び、之を摸範となせり。ハウフは、二十五歲の時既に世を去りしかば、文躰未だ圓熟の域に達せず。獨特の妙所を有せずと雖も、性來詞藻に富みしを以て、能く古人の句を用ゐて、巧に流麗の文を草し。獨逸國民の日常生活を寫したる散文としては、大に愛讀の價値あり。苟も一國の文學を視はんとするものは、獨り古文の美に垂涎することなくして、通俗文學の趣味津々たるをも合せて味ふ可きなり。此點より見る時は、ハウフの作の如きは、大に貴重なり。

小說は、多くは短篇にして、『歌妓』(ヌ)『ディ、ゼンゲリン』(ル)『ユード、ジュース』、『惡魔サタンの追懷錄』(オ)『メモアーレン、デス、サタン』(リ)『ファンタジ

ツ. Kaiser Maximilian von Mexiko.
チ. Arabesken.
7. Eduard Paulus.
タ. Saul.
レ. Friedrich II von Hohenstaufen.
ソ. Florian Geyer.
カ. Die letzten Ritter von Marienburg.
ヨ. Lichtenstein.
6. Johann Georg Fischer.

エン、イム、ブレーメル、ラーツケルレル』(カ)『マリエンブルグの最後の武士』の如き、文辭何れも流麗なり。傑作として最も名あるは、武士氣質を寫せる(ヨ)『リヒテンシュタイン』なり。

(6) ヨハン、ゲオルグ、フィッシェル。

千八百十六年十月二十五日ヰルテムベルグに生まれ、千八百九十七年五月四日スツットガルトに死せり。フィッシェルは、讃美歌バラード及び劇詩を作れり。詩歌にて『新歌』『獨逸の女』『新鮮の空氣』等あり。劇詩にては、(タ)『ザウル』(レ)『ホーヘンスタウフェン家のフリードリヒ二世』(ソ)『フロリアン、ガイエル』(ツ)『皇帝マキシミリアン、フォン、メキシコ』等を傑作とす。

(7) エドアルド、パウルス。

千八百三十七年十月十日スツットガルトに生まる。フィッシェルの死後、パウルスは、シュワーブ第一流の抒情詩人と稱せらる。パウルスは、好古學に通ずるの故を以て、古器物の保存に盡力し、千八百九十二年には、散亂せる詩歌を蒐集して出版し、千八百九十七年に至り、詩集(ヲ)『アラベスケ

ン』を出せり。パウルスは、多く詩材をシュワープの故郷に取り、故國の美を歌へり。

第八章　ダス、ユング、ドイッチュランド。

千八百三十年佛國に七月の革命あり。此影響は、獨逸に及び、民權自由の政治的運動起り、政府の專權に反抗し、公論の鎮壓を防禦せんとせり。此政治的運動は、文藝の思潮に波動を及ぼしたり、かくして現はれたる一派を、文學史上、ダス、ユング、ドイッチュランドと云ふ。これ又文藝界に於ける一種の反動にして、千七百七十年代に、天才主義の運動起りしと同一なり。此派の詩人は、政治的の題目を捕へ、時事問題を歌はんとし、文藝と實世間とを接近せしめんとしたるなり。此反動的運動の原動者を以て目せらるゝは、諷刺的の文字を弄したるハイネ及び世俗の宿弊を痛罵したるルードヰヒ、ビルネの二人なり。グッコー及びラウベの二人出づるに及んで、此主義の旗幟は愈々鮮明となれり。

(1) カール、グッコー。

1. Karl Gutzkow.

(上)ハイネ　(中)グッコー　(下)フェルディナンド、レッセル

(上)ビルネ　(中)ラウベ　(下)ヘッベル

ン』を出せり。バウルスは、多く詩材をシュワーブの故郷に取り、故國の美を歌へり。

第八章　ダス、ユンゲ、ドイッチュランド。

千八百三十年佛國に七月の革命あり。此影響は、獨逸に及び、民權自由の政治的運動起り、政府の專權に反抗し、公論の鎮壓を防禦せんとせり。此政治的運動は、文藝の思潮に波動を及ぼしたり、かくして現はれたる一派を、文學史上、ダス、ユンゲ、ドイッチュランドと云ふ。これ又文藝界に於ける一種の反動にして、千七百七十年代に、天才主義の運動起りしと同一なり。此派の詩人は、政治的の題目を捕へ、時事問題を歌はんとし、文藝と實世間とを接近せしめんとしたるなり。此反動的運動の原動者を以て目せらるゝは、諷刺的の文字を弄したるハイネ及び世俗の宿弊を痛罵したるルードヰヒ、ビロルネの二人なり。ゲッツコー及びラウベの二人出づるに及んで、此主義の旗幟は愈々鮮明となれり。

(1) カール、グッツコー。

1. Karl Gutzkow.

(上)ビロルネ　(中)ワウベ　(下)ヘルギエル
(上)ハイネ　(中)グッツコー　(下)フェルディナンド、ラッサレ

リ. Graf Essex.
ヌ. Die Karlsschüler.
ル. Gottsched und Gellert.
3. Julius Mosen.
ヨ. Der Königsleutnant.
ヘ. Zopf und Schwert.
ト. Uriel Acosta.
チ. Das Urbild des Tartüffe.
イ. Die Ritter vom Geist.
ロ. Der Zauberer von Rom.
ハ. Hohenschwangau.
ニ. Die Söhne Pestalozzis.
2 Heinrich Laube.

千八百十一年三月十七日伯林に生まれ、千八百七十八年十二月十五日フランクフルト、アム、マインに死す。グッツコーは、小說家にして、且つ劇詩家なり『精神上武士』(イ)(ディ、リッテル、フォム、ガイスト)『羅馬の魔法者』(ロ)(デル、ツァウベレル、フォン、ローム)(ハ)『ホーヘンシュワーンガウ』(ニ)『ディ、ゼーチ、ペスタロッチス』等の小說及び(ホ)『デル、ケーニッヒスロイトナント』(ヘ)『ツォツプフ、ウント、シュエルト』(ト)『ウリエル、アコスタ』(チ)『ダス、ウルビルド、デス、タルティ、ユフェ』の諸曲は、グッツコーが、自家の主義を發揮したる作なり。

(2) ハインリヒ、ラウベ。

千八百六年九月十八日シュレージエンのスプロッタウに生まれ、千八百八十四年八月一日墺都維也納に死す。ラウベは、最も劇詩に長じたり(リ)『エセックス伯』(ヌ)『カール學校生』(ル)『ゴッドシェッドとゲルレルト』等の作名あり。

(3) ユリウス、モーゼン。

千八百三年七月八日ザクセン國のマリーナイに生まれ、千八百六十七年十月十日オルデンブルグに死す。モーゼンは、俗謠に長じ兼ねて、叙事詩及び劇詩をも作れり。

俗謠『ディレッテン、ツェーン、フォム、フィールテン、ギメント、』『アンドレアス、ボーフェル、』『デル、トロムペーテル、アン、デル、カッパハ』の三篇、叙事詩『リッテル、ワーン、』『アハスフェール、』(ロ)『劇詩』(ハ)『ハインリヒ、デル、フィンクレル』(ホ)『オットー三世』(ヘ)『コラ、リエンチ、』(ト)『ベルンハルド、フォン、ワイマール』等は、モーゼンの作中傑出したるものなり。

(4) フェルディナンド、フライリグラート。

千八百十年六月十七日デトモルドに生まれ、千八百四十八年及び四十九の兩年政治上の事變を避けて、英國に行き、數年を送りしが、後再び故國に歸れり。千八百七十六年三月十八日スツットガルト附近のカンスタットに死す。『移住人、』『アン、マイヤ、トホテル、』『樅、』『花の復讐、』『デル、レーエンリット、』『オーリーブ、ゾーラング、ヅー、リーベン、カンスト、』等の諸篇は、

ロ. Bernhard von Weimar.
4. Ferdinand Freiligrath.
ハ. Heinrich der Finkler.
ホ. Otto III.
ヘ. Cola Rienzi.

フライリグラートの詩中最も名あるものなり。

(5) ホッフマン、フォン、ファルレルスレーベン。

千七百九十八年四月二日ファルレルスレーベンに生まれ、千八百七十四年一月十日に死す。ホッフマンの得意とする所は、俗謠及び童謠なり、又古代詩歌の研究家として其名を知らる。

以上列擧したる詩人の外、前章墺太利詩人として論じたるニコラウス、レーナウ、アナスタシウース、グリューン等も、此派の詩人と主義を同うしたり。されど茲に再錄せず。

第九章　千八百四十年代に於けるロマンティスムス派の詩人。

(1) ゴットフリード、キンケル。

千八百十三年八月十一日ボン市に近きオーベルケッセルに生まる。父は、牧師なり。千八百三十八年ボン大學に招聘されて、神學の講師となりしは、キンケルの名が世に知られし始めなり。後神學より哲學の講座に

1. Gottfried Kinkel.
5. Hoffmann von Fallersleben.

2. Karl Simrock.

轉じ、千八百四十六年教授となれり。然るに教授の職に在ること僅に二年にしてキンケルは、精神少しく異狀を來たし、自由主義を唱へ、一時懲治監に投ぜられしが、友人の斡旋によりて英國に逃き、流竄の身として、數年を送れり、歸國の後は、瑞西のチューリッヒに住し、千八百八十二年十一月十四日に死す。

キンケルは、抒情詩人にして、且つ叙事詩人なり、『宵の靜けさ』『夜の慰籍』『アインガイストリヒ、アーベンドリード』『日曜日の靜寂』『羅馬の夜』『アールタールの移住民』等の數篇皆名あり。

(2) カール、ジムロック。

千八百二年八月二十八日ボンに生まれ、千八百七十六年七月十八日ボン大學に於て獨逸語學及び文學の教授たりし時死す。ジムロックは、創作の才ありしと雖も、其名をなしたるは、古代詩歌の飜譯に在り。ニーベルンゲンリードを始めとし、中古詩人フォーゲルワイデ及びエッシェンバハの詩を飜譯したるは、ジムロックの功を多とせざる可からざるなり。

(3) モーリッツ、グラーフ、フォン、シュトラッハヰッツ。

千八百二十二年、シュレジエンのベーテルヰッツに生まれ、千八百四十七年墺都維也納に死す。シュトラッハヰッツの作にては、『歸鄉』『アン、デイ、ロマンティク』『ゲルマニア』及び『ダス、ヘルツ、フォン、ドーグラス』等の數篇の詩を學ぐ可きなり。

(4) アンネッテ、フォン、ヅロステ、ヒュルスホーフ。

千七百九十七年一月十日ミュンステルに近き、ヒュルスホーフに生まれ、千八百四十八年五月二十四日ボーデンゼー附近のメールスブルグに死す。ヅロステ、ヒュルスホーフは閨秀作家にして、其作歌は優麗を以て名あり。歌集(イ)『ダス、ガイストリッヘー、ヤール』及び(ロ)『レッテ、ガーベン』に載する所の諸篇句々珠玉、大に吟誦す可きものあり。

イ. Das geistliche Jahr.
ロ. Letzte Gaben.
5. Emanuel Geibel.

3. Moritz Graf von Strachwitz.
4. Annette von Droste-Hülshoff.

(5) エマヌエル、ガイベル。

千八百十五年十月十八日リューベックの牧師の家に生まれ、千八百八十四年四月六日に死す。

ハ. Brunhild.
ニ. Sophonisbe.

ガイベルは、近世に於ける著名なる抒情詩人なり。歌ふ所は、戀愛、人格、誠實、人情等にして、鼓吹せんと努めたるは、耶蘇教主義、希臘主義及び獨逸主義の調和融合にありき。詩集三卷載する所、數百篇皆共に吟誦す可きものなり。ガイベルは、又舞臺の上の作にも筆を染め、悲劇(ハ)『ブルンヒルド』は、ニーベルンゲンリードに題目を取りしものなりと雖も、ヘッベルの如く古代の殘忍なる性格を其儘に描くことを敢てせずして、之を近世化して寫したり。他の悲劇(ニ)『ソフォニスベ』は、對話の語辭高雅にして大に名聲を博し、千八百六十七年普魯西亞王は、懸賞金千ターレルと金牌とを以て、之を賞したり。

墺太利詩人アダルベルト、スティフテル及びフリードリヒ、ハルム等も此中に數ふ可きものなりと雖も、前章に述べたるを以て、再説の勞を省かん。

2. Friedrich Bodenstedt.
ロ. Lieder des Mirza Schaffy

1. Adolf Friedrich von Schack.
イ. Durch alle Wetter.

○千八百四十八年以後の文學。

第一章　過渡時期の詩人。

(1)　アドルフ、フリードリヒ、フォン、シャック。

千八百十五年八月五日シュエリーンに生まれ、千八百九十五年四月十四日羅馬に死す。シャックは、西班牙、亞剌比亞の文學に精通し、其他廣く外國文學を研究したり。波斯の叙事詩『シャハナーメ』を模倣したる一篇の如き、シャックの外國詩歌に關する研究の該博なることを證して餘りあり。シャックは、又創作の才をも有し、韻文の小説(イ)『ツルヒ、アルレ、エッテル』叙事詩『ローターール』、悲劇『ティマンドラ』等の作あり。

(2)　フリードリヒ、ボーデンシュテット。

千八百十九年四月二十二日バイヲに生まれ、千八百九十二年四月十八日ヰースバーデンに死す。ボーデンシュテットは、シェークスピアの飜譯家及び東洋文學の研究家として其名頗る高し。氏の作(ロ)『ミルツァ、シャッ

ヌ. Alcibiades.
4. Paul Heyse.
5. Otto Roquette.
ヘ. Hans Lange.
ト. Colberg.
チ. Graf Königsmark
リ. Elfriede.
3. Hermann Lingg.
ハ. L'Arrabbiata.
ニ. Elisabeth Charlotte.
ホ. Ludwig der Bayer.

フィーの歌』の如き、百版以上を重ねたり。

(3) ヘルマン、リング。

千八百二十年一月二十二日ボーデンゼーに沿へるリンダウに生まる。リングは、叙事詩の大作『人民移轉』、數曲の劇詩及び三卷の詩集を以て、其名を文壇に知らる。

(4) パウル、ハイゼ。

千八百三十年三月十五日伯林に生まれ、現今ミュンヒェンに住せり。ハイゼは、リールと共に獨逸現今の小說家中第一流に數へらる、而して兼ねて又劇詩人なり。ハイゼは始め、ティーク、アイヒェンドルフの感化を受け、其後自己の苦心によりて、技大に進みたり。小說中最も傑作と稱せらるゝは(ハ)『ララビアタ』なり。劇詩にては、(ニ)『エリザベート、シャロテ、』(ホ)『ルードヰヒ、デル、バイエル、』(ヘ)『ハンス、ラング、』(ト)『コルベルグ、』(チ)『グラフ、ゲーニッヒスマルク、』(リ)『エルフリーデ、』(ヌ)『アルチビアデス』等の諸曲あり。

(5) オットー、ロケッテ。

カ. Nibelungen.
オ. Ekkehard.
ワ. Gaudeamus.
7. Wilhelm Jordan
ル. Buchstabierbuch der Leidenschaft.
6. Joseph Viktor Scheffel.

千八百二十四年四月十九日ボーゼンのクロトシーンに生まれ、千八百九十六年三月十八日ダルムシュタット教授在職中に死せり。お伽噺『ワルドマイステルス、ブラウトファールト』、小說(ル)『プフスタビールブッフ、デル、ライデンシャフト』、單篇の詩『アム、チッカール』、『アム、ライン』、『ボエジー、デス、シュメルツェス』等は、ロケッテの作中の佳品なり。

(6) ヨーゼーフ、ヰクトル、シェッフェル。

千八百二十六年二月十六日カールスルーヘに生まれ、千八百八十六年四月九日に死す。シェッフェルの作は、最も當時の讀書界の嗜好に投じ、歷史小說(オ)『エッケハルト』は、百八十版となり、詩篇『トロムペーテル、フォン、ゼキンゲン』は、二百五十版を重ね、『フラウ、アヴンチウール』も十七版となり、詩集(ワ)『ガウデアームス』は、版を重ぬること六十回なりき。

(7) ヰルヘルム、ヨルダーン。

千八百十九年二月八日東普魯西のインステルブルグに生まる。ヨルダーンが、詩人として、始めて名を成せしは(カ)『ニーベルンゲン』なり。全

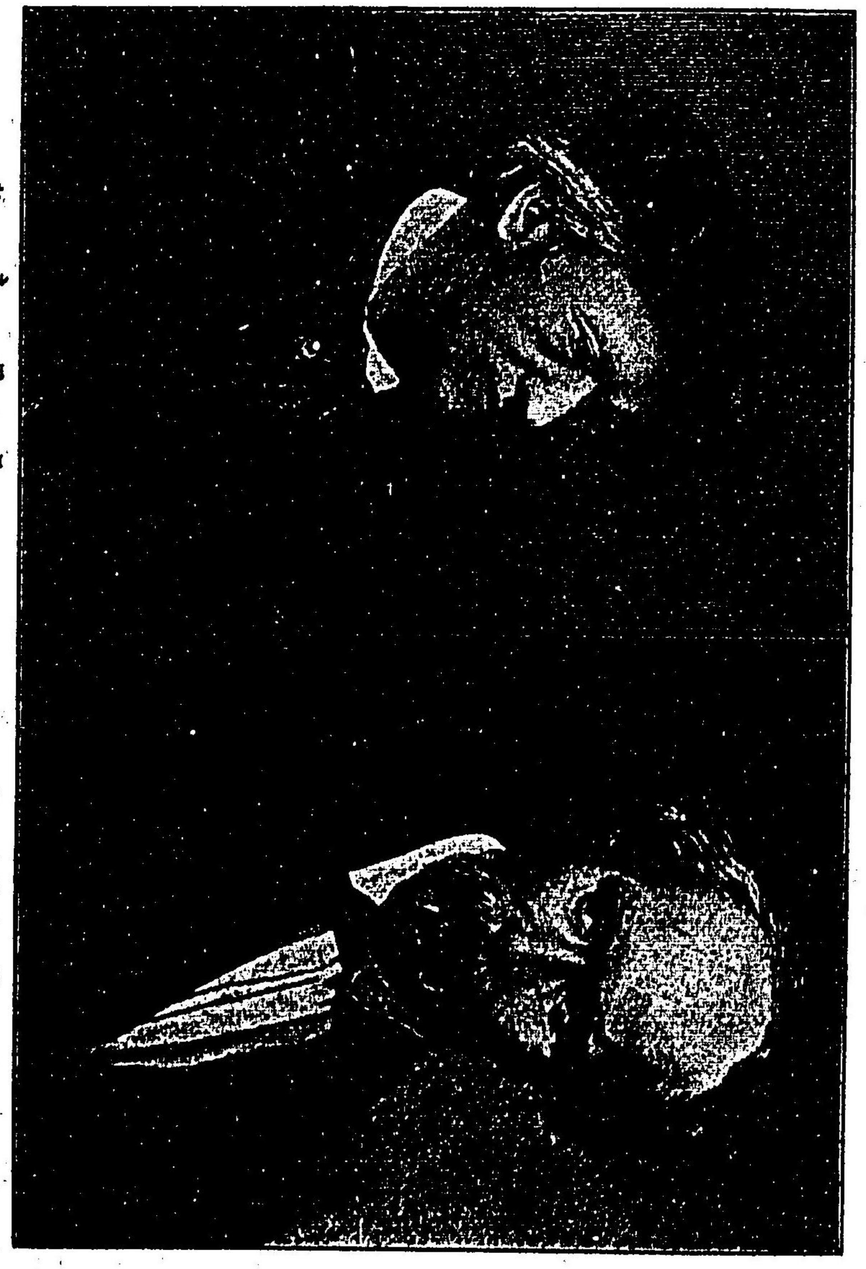
篇は、二部に分かれ、第一部は『ジョーグフリード物語』にして、第二部は『セルデブランドの歸郷』なり。これ古代の有名なる『ニーベルンゲン』及び『ディートリヒ』の二物語を詩人の新案によりて、合して一篇となしたるものなり。此篇は、語辭雄健、韻律美妙の點に於て、ヘッベル及びガイベルの作に優ること數等、作中の人物ジーグフリード、グリームヒルデ及びブルンヒルデの如きも、能く其特性を現はし、讀者をして、充分の同情を表せしむ。ヨルダンの最近の作は、小說（ヨ）『ディ、ゼバルヅ』及び（タ）『ツワイ、ホーゲン』なり。ヨルダーンは、創作の才のみならず、飜譯の才をも有したり。ホメールの二大叙事詩『イリアス』及び『オディセー』二篇の譯は、原文の妙を傳ふること、先人を凌ぐと稱せらる。

(8) リヒャルド、ワグナル。

近時我が文壇に於て、ワグナルの名漸く高からんとす。實にワグナルは、十九世紀の偉人なり。獨逸國運の隆盛に伴ひ、物質的の進歩は、驚く可し、然かも其結果として、社會は無趣味に陷らんとするの恐ありき。ワグ

8. Richard Wagner,

ヰ. Die Sebalds.
タ. Zwei Wiegen.



ヴ キ ア ッ ク

篇は、二部に分かれ、第一部は『ジーグフリード物語』にして、第二部は『セルデブランドの歸郷』なり。これ古代の有名なる『ニーベルンゲン』及び『ディートリヒ』の二物語を詩人の新案によりて、合して一篇となしたるものなり。此篇は、語辭雄健、韻律美妙の點に於て、ヘッベル及びガイベルの作に優ること數等、作中の人物ジーグフリード、クリームヒルデ及びブルンヒルデの如きも、能く其特性を現はし、讀者をして、充分の同情を表せしむ。ヨルダンの最近の作は、小說（ヨ）『ディ、ゼバルヅ』及び（タ）『ツワイ、ヰーゲン』なり。ヨルダーンは、創作の才のみならず、飜譯の才をも有したり。ホメールの二大叙事詩『イリアス』及び『オディセー』二篇の譯は、原文の妙を傳ふること、先人を凌ぐと稱せらる。

(8) リヒャルド、ワグヲル。

近時我が文壇に於て、ワグヲルの名漸く高からんとす。實にワグヲルは、十九世紀の偉人なり。獨逸國運の隆盛に伴ひ、物質的の進歩は、驚く可し、然かも其結果として、社會は無趣味に陷らんとするの恐ありき。ワグ

8. Richard Wagner.

1. Die Sebalds.
2. Zwei Wiegen.

ワグヲル

ナ. Parsifal.　レ. Tannhäuser.
ソ. Lohengrin.
ツ. Tristan und Isolde.
ネ. Ring des Nibelungen.

ネル茲に鑑むる所あつて、詩歌、音樂の美によりて、人心の腐敗を防ぎ、進んでは、高潔の思想を養はんとし、閑靜の地バイロイトに、新樂の樂堂を建設し、自家獨特の樂劇を演ずるに至れり。

ワグネルの手に成れる、古代物語を骨子としたる（レ）『タンホイゼル』、（ソ）『ローヘングリーン』、（ツ）『トリスタン、ウント、イゾルデ』、（ネ）『リング、デス、ニーベルンゲン』、（ナ）『パルシファル』等の曲は、今日に於て、嘆美の聲止まずして、日々盛に演ぜられつゝあり。從來の樂劇と稱せらるゝものは、音樂主にして、語辭は副となれり、かくしては、樂劇も、單なる音樂と何の選ぶ所なくして、幼稚なるものなり。此欠點を看破し、語辭を主とし、音樂は、之を扶くるの用に供せしめたるの大功は、ワグネルの名譽と云はざる可らず。蓋しワグネルが、自己の作をオペラと呼ばずして、『ヲルトトーンドラマ』又は『トーンドラマ』と稱するは、此改革の意を含めたるならん。ワグネルに就きて云ふ可き事多しと雖も、之を他日に讓らん。ワグネルは萊府の人、生まれしは千八百十三年にして、死後昨年を以て將に二十年な

ヰ. Die Hosen des Herrn von Bredow.
タ. Der Wärwolf.
ナ. Cabanis.
ソ. Der falsche Waldemar.
カ. Der Roland von Berlin.
ヰ. Bilder und Sagen aus der Schweiz.
ノ. Leiden und Freuden eines Schulmeisters.
10. Willibald Alexis.
9. Jeremias Gotthelf.
ウ. Uli der Knecht.
ム. Uli der Pächter.
ウ. Köthi die Grossmutter.

り。

(9) エレミアス、ゴットヘルフ。

千七百九十七年十月四日フライブルグのムルテンに生まれ、千八百五十四年十月二十二日瑞西國のリュッエルフリューに於て牧師たるの時死す。ゴットヘルフはアウエルバッハの理想的なるに相反して寫實的なり。

（ラ）『ウリ、デル、クネヒト、』（ム）『ウリ、デル、ペヒテル、』（ウ）『ケティ、ディ、グロース、ムッテル、』（ヰ）『ビルデル、ウント、ザーゲン、アウス、デル、シュワイツ、』（ノ）『ライデン、ウント、フロイデン、アイネス、シュールマイステルス』等の諸篇は著名なり。

(10) ヰリバルド、アレキシス。

千七百九十八年六月廿九日プレスラウに生まれ、千八百七十一年十二月十六日アルンシュタットに死す。プリードリヒ大王の事蹟を敘したる小說（ヲ）『カバニス』を始めとし、アレキシスは小說の材料を母國の歷史に取り、相續いて、（ソ）『デル、ファルシェ、ワルデマル、』（カ）『デル、ローランド、フォン、ベルリン、』（ヨ）『ディ、ホーゼン、デス、ヘルン、フォン、ブレドウ、』（タ）『デル、エルヲルフ、』（レ）『ルーヘ、イスト、ディ、エルステ、ビュルゲルプフリヒト、』（ソ）『イビングリム、』（ツ）『ドロテー』等の諸篇を公にしたり。

(11) ベルトールド、アウエルバッハ。

千八百十二年二月二十八日シュワルツワルドのノルドステッテンに生まれ、千八百八十二年二月八日佛蘭西國のカンヌに死す。（ネ）『シュワルツエルデル、ドルフゲシヒテン』の一篇は、通俗文學の逸品として、アウエルバッハの名聲を高からしめしが、後アウエルバッハの文藝に關する態度一變し、自由主義を皷吹したる諸篇（ナ）『アウフ、デル、ヘーヘ、』（ラ）『ダス、ランドハウス、アム、ライン、』（ム）『ヴルドフリード』等出づるに至れり。

第二章　寫實派。

クライスト世を去り、グリルパルツェル文壇を退いて後、獨逸劇界に頭角を現はせし二劇詩人あり。其一人をヘッベルとなし、他の一人をルードヰヒとなす。此二詩人が執りたる主義を、寫實主義（レアリスムス）と云ふ。寫實主義とは、其名の示すが如く、修飾を加へずして、事物を其儘に寫す

ナ. Auf der Höhe.
ウ. Das Landhaus am Rhein.
ム. Waldfried.
11. Berthold Auerbach.
ネ. Schwarzwälder Dorfgeschichten.
レ. Ruhe ist die erste Bürgerpflicht.
ソ. Isengrim.
ツ. Dorothee.

1. Friedrich Hebbel.
イ. Judith.
ロ. Herodes und Mariamne.
ハ. Genoveva.
ニ. Gyges und sein Ring.
ホ. Maria Magdalena.

を以て目的としたるものなり。其標榜する所の主義は、何れにせよ、要するに此派の勃興も、又文藝思潮上の一種の反動に外ならずして、ロマンティスムスの夢幻的、ユンゲ、ドイッチュランドの社會的が、孰れも極端に馳せたるの弊を、看破して起りたるなり。

(1) フリードリヒ、ヘッベル。

千八百十三年三月十八日エッセルブーレンに生まれ、千八百六十三年十二月十一日墺都維也納に死す。

ヘッベルは、劇詩人なり。處女作悲劇(イ)『ユディット』及び(ロ)『ヘロデス、ウント、マリアムネ』は、詩材を聖書の事實に取りたるものなり。古代物語によりたる作にては、(ハ)『ゲノフェーファ』あり、傑作と稱せらるゝは、かの『ニーベルンゲンリード』を劇詩に改作したるトリロギーなり。時の普魯西王は、此曲を第一等とし、千ターレルの懸賞金を與へたりと云ふ。此外(ニ)『ギーゲス、ウント、ザイン、リング』及び(ホ)『マリア、マグダレーナ』等の曲あり。

2. Otto Ludwig.
ヘ. Der Elbförster.
ト. Zwischen Himmel und Erde.
3. Gustav Freytag.

ヘッベルの劇詩的才能は、非凡なりと雖も、好んで奇怪の事實を寫さんとしたるを以て、文藝の必要條件たる、美趣を損じたり。されば其悲劇は、恐怖の念を惹起す可しと雖も、同情は更らに起らざるなり。されどヘッベルの短篇の詩は、雅趣に富み、情を抒ぶること濃かなり。

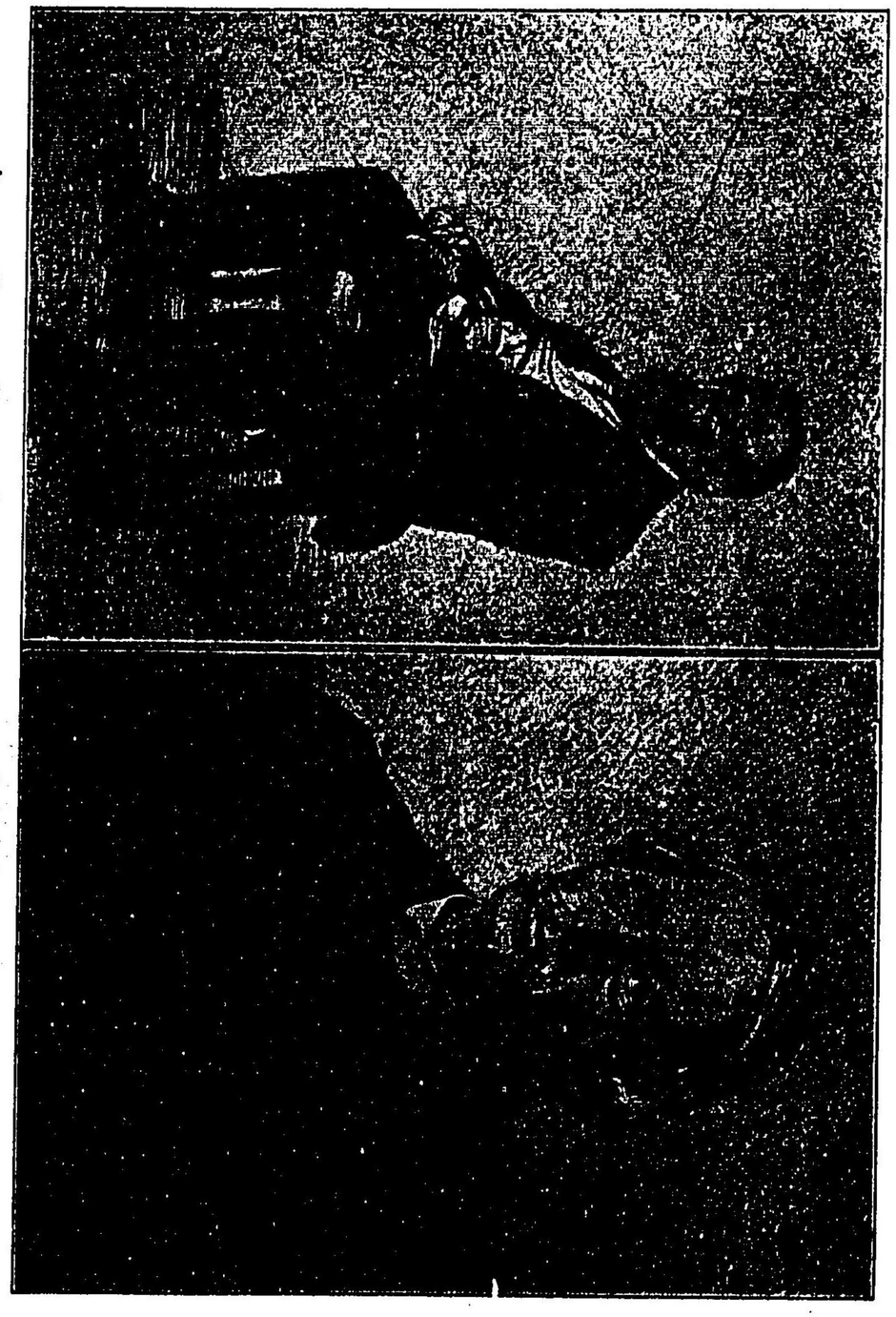
(2) オットー、ルード井ヒ。

千八百十三年二月十一日マイニンゲンのアイスフェルドに生まれ、千八百六十五年二月二十五日ドレスデンに死せり。

ルード井ヒの作として稱せらるゝは、二劇詩(ヘ)『デル、エルブフェルステル』及び『ディ、マッカベーエル』と、大部の小說『天地間』(ト)(ツ井ッシェン、ヒムメルヴント、エルデ)なり。ルード井ヒは、創作の才のみならず、又批評的の才をも有し、シェークスピア及びシルレルを論評したり。

(3) グスターツ、フライターク。

千八百十六年七月十三日シュレージエンのクロイツブルクに生まれ、千八百九十五年四月三十日井ースバーデンに死す。享年七十九歳なり。



ヒトルヤ

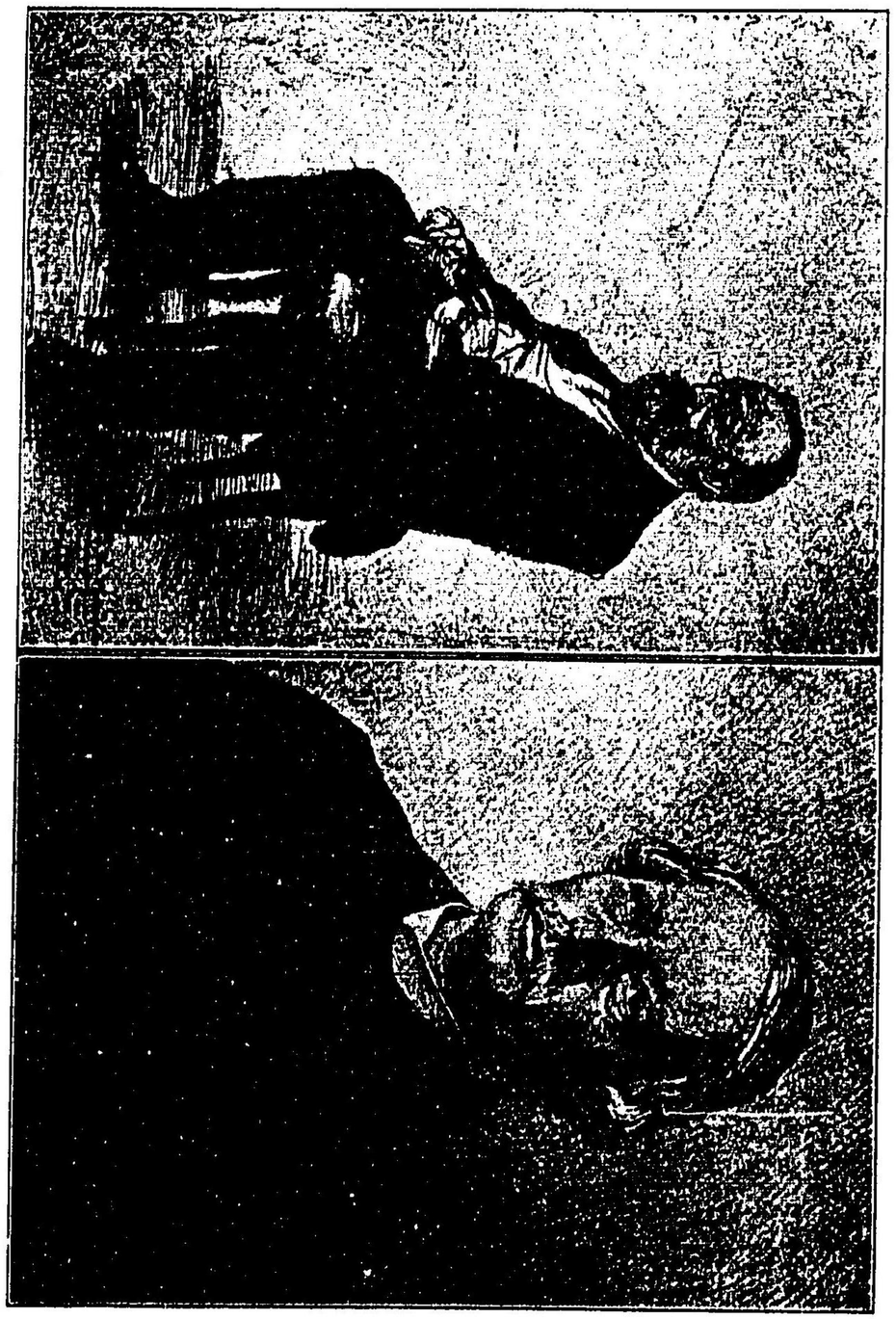
ダーフィンク

チ. Bilder aus der deutschen Vergangenheit.
リ. Die Journalisten.

父は市長にして、愛國家なりしかば、幼兒フライタークも、大に父の感化を受けたり。フライタークは、千八百三十五年プレスラウ大學に入り、抒情詩人として有名なるホッフマン、フォン、ファルレルスレーベンに就いて、獨逸古文學の講義を聽けり。一年餘にして、伯林大學に移り、ラハマン教授に就いて、獨逸古文學の研究を續けたり。千八百三十九年『獨逸劇詩の濫觴』と題する羅甸語の論文を呈出して、學位を得、再びプレスラウに赴きて、大學の講師となり、一年の兵役を終へて大學に復職し、獨逸の中古近世文學及びゲーテ、シルレル以後の文學を講じ、傍ら古文書を繙き、文明史に關する論文（チ）『獨逸過去の面影』を書けり。フライタークの劇詩にて、傑作と稱せらるゝは、千八百五十三年の作喜劇（リ）『新聞記者』（ディ、ジョーナリステン）なり。此曲は、フライタークが、親しく經驗したる新聞記者社會の內幕を寫したるものにして、之を叙するに滑稽の文辭を用ゐしかば、當時に在りて好評を博したるのみならず、今日に至りても、屢〻舞臺に上ぼると云ふ。『デル、グラーフ、ゾルデマール』及び『ディ、ヴァレンティ

父は市長にして、愛國家なりしかば、幼兒フライタークも、大に父の感化を受けたり。フライタークは、千八百三十五年プレスラウ大學に入り、抒情詩人として有名なるホッフマン、フォン、ファルレルスレーベンに就いて、獨逸古文學の講義を聽けり。一年餘にして、伯林大學に移り、ラハマン教授に就いて、獨逸古文學の研究を續けたり。千八百三十九年『獨逸劇詩の濫觴』と題する羅甸語の論文を呈出して、學位を得、再びプレスラウに赴きて、大學の講師となり、一年の兵役を終へて大學に復職し、獨逸の中古近世文學及びゲーテ、シルレル以後の文學を講じ、傍ら古文書を繙き、文明史に關する論文（チ）『獨逸過去の面影』を書けり。フライタークの劇詩にて、傑作と稱せらるゝは、千八百五十三年の作喜劇（リ）『新聞記者』（ディ、ジャーナリステン）なり。此曲は、フライタークが、親しく經驗したる新聞記者社會の内幕を寫したるものにして、之を叙するに滑稽の文辭を用ゐしかば、當時に在りて好評を博したるのみならず、今日に至りても、屢〻舞臺に上ぼると云ふ。『デル、グラーフ、ゾルデマール』及び『ディ、ヴァレンティ

チ. Bilder aus der deutschen Vergangenheit.
リ. Die Journalisten.



グースタフ、フライターク

ヌ. Die Fabier.
ル. Technik des Dramas.

テ』兩曲に共通する趣意は、眞正の愛は、階級の相違より起る障害を排除するの力ありと云ふ事にあり、依つて謂ふに、フライタークは、上流社會と下流社會との懸隔を減じ、其間の調和を謀らんとしたるなり。兩曲の結構、筆致は、輕輕し難しと雖も、後曲が餘りに、社會の實狀を寫さんとして、小說的となりしは、失敗と云はざる可らず、從て前曲程に世人の喝采を博せざりき。此外悲劇ヌ『ディ、ファービエール』も著名なり。劇詩に關する書『戲曲の技術』ル（テヒニック、デス、ドラーマス）は、立論正確にして、然かも文辭明晰なり、レッシングの演劇評論と共に、永く斯道の寶典たるべし。

フライタークは、世人の歡迎によりて得意となり、益劇詩に力を振はんとする折柄、民權自由の議論沸騰し、政府人民の軋轢次第に激しくなりしが、佛國に二月の革命ありて、人心一層激昂し、終に大破裂を招くに至れり。

嘗て故山に在るの日、國人とポーランド人との反目を見て、國事を顧みるの念を養ひたるフライタークは、此擾亂起るに際し、詩文を擲て、萊

ヲ. Soll und Haben.
カ. Die Verlorene Handschrift.
ヨ. Grenzboten.

府に行き、ユリアン、シュミットを扶けて、政治文學雜誌の記者となり、輿論を喚起して、國狀の紛亂を解除せんと企てたり。此雜誌を『グレンツボーテン』と名づく。此誌の執る所の主義は、自由主義にして、獨逸兩國を分離して、墺太利を排し、普魯西亞を盟主と仰ぐを以て、立論の要旨としたり、而して極端なる妄論者を說破せり。

フライタークは、かくして劇界のみならず、政界に於ても名を知らるるに至れり。されどフライタークの本領は、政治論に非らず、又劇詩に非らずして小說なりき。

千八百五十五年商人氣質を骨子としたる『ゾル、ウント、ハーベン』を世に公にして以來フライタークの名は、小說界に藉き、次いで大學教授エルチルの境遇を題目とし、學事に忠なる學者を描きたる『ディ、フェルローレチ、ハンドシュリフト』出づ。此作は文意の妙趣第一作に劣れりと雖も、フライタークの作中小說の二傑作として、並稱すべきものたるは疑なきなり。

ト. Die Vagabunden.
ウ. Ein Schneider.
ム. Christian Laumfell.
5. Klaus Groth.
ソ. Leonore.
ツ. Lorbeerbaum und Bettelstab.
テ. Die Wiener in Paris.
ニ. Die Ahnen.
ヌ. Karl von Holtei.
ネ. Schlesische Gedichte.
レ. Der alte Feldherr.

千八百七十年普佛戰爭起る。フライタークは、皇太子の陣營に召されて、從軍記者となり、人馬の勇壯なる活動を見て、坐ろに往古日耳曼人のゴール侵擊を想ひ起し、此感想凝て、八篇の小說『祖先』(ヨ)（ディ、アーチン）となれり。フライタークに就いては、尙云ふ可き事多しと雖も、今は僅かに其概略を述ぶるに止まらん。

(4) カール、フォン、ホルタイ。

千七百九十八年一月二十四日プレスラウに生まれ、千八百八十年二月十二日に死す。

ホルタイは、故郷シュレージエンの方言を以て、詩を作れり。千八百三十年に出でし詩集(タ)『シュレジッシュー、ゲディヒテ』は、則ちこれなり。劇詩(レ)『老將軍』(ソ)『レオノレ』(ツ)『ローレルベールバウム、ウント、ベッテルシュタブ』(テ)『巴里に於ける維也納人』小說(ナ)『浮浪人』(ラ)『仕立屋』(ム)『クリスティアン、ラムフェル』等は、最も廣く讀書界に歡迎されたり。

(5) クラウス、グロート。

ノ. Problematische Naturen.
ハ. Hammer und Amboss.
7. Friedrich Spielhagen.
ウ. Quickborn.
ヰ. Vertellen.
6. Fritz Reuter.

千八百十九年四月二十四日ホルシタインのハイデ市に生まれ、千八百九十九年六月二日キールに死す。

グロートの作にては、プラットドイッチュ方言詩集（ウ）『クヰックボルン』及び散文の物語（ヰ）『フェルテルレン』の二作最も名あり。

(6) フリッツ、ロイテル。

千八百十年十一月七日メクレンブルクのスターフェンハーゲンに生まれ、千八百七十四年七月十二日アイゼナハに死す。

ロイテルは、グロートと同じく方言の詩『ロイシェン、ウント、リーメルス』『オルレ、カメルレン、』『ウト、ミヲ、ストロームティド』等を作れり。

(7) フリードリヒ、シュピールハーゲン。

千八百二十九年二月二十四日マグデブルクに生まれ、現今伯林に住せり。

シュピールハーゲンは、小説家なり。處女作（ノ）『プロブレマーテッシェー、ナツーレン』を以て、文壇に現はれ、次いて『金槌と鐵砧』ヲ（ハムメル、ウント、アムボス）、（ク）『イン、ライ、ウント、グリード』の諸作を出せり。最も著名なるものは『海嘯』ヤ（スツルムフルート）なり。

(8) ヰルヘルム、ラーベ。

千八百三十一年九月八日エッセルスハウゼンに生まれ、ブラウンシュワイヒに住せり。

ラーベの文は、婉轉滑脫の妙所あり。千八百六十四年に出でたる『俄へたる牧師』マ（フンゲルパストル）は、作中の白眉と稱せらる。此外『雀街記錄』ケ（クローニク、デル、シペルリングスガッセ）『聖泉』フ（デル、ハイリゲ、ボルン）、コ『グートマンス、ライゼン』等皆諷刺的にして、讀者をして腹を解かしむ。

9. Theodor Storm.
ケ. Chronik der Sperlingsgasse.
フ. Der heilige Born.
コ. Gutmanns Reisen.
ク. In Reih und Glied.
ヤ. Sturmflut.
8. Wilhelm Raabe.
マ. Hungerpastor.

(9) テオドール、シュトルム。

千八百十七年九月十四日フーズムに生まれ、千八百八十八年七月四日ハーデマルシェン附近のハーヲラウに死す。

シュトルムは、抒情詩人にして、且つ小説家なり、而して描がきし所は、主

11. Konrad Ferdinand Meyer. ア. Züricher Novellen. 10. Gottfried Keller. ヱ. Der grüne Heinrich.
12. Wilhelm Heinrich Riehl. サ. Jürg Jenatsch. テ. Die Leute von Seldwyla.
キ. Der Heilige.

として故郷の事件なり。

(10) ゴットフリード、ケルレル。

千八百十五年七月十九日チューリッヒ附近のグラットフェルデンに生まれ、千八百九十年七月十五日に死す。

ケルレルは、小説家なり。(エ)『デル、グリューテ、ハインリヒ』(テ)『ディ、ロイテ、フォン、セルドヰーラ』(ア)『チューリッヒェル、ノベルレン』等の諸作名高し。

(11) コンラード、フェルディナント、マイエル。

千八百二十五年十月十一日チューリッヒに生まれ、千八百九十八年十一月二十八日キルヒベルグに死す。

マイエルは小説(サ)『ユルグ、エナッツュ』及び(キ)『デル、ハイリゲ』の二篇によりて、夙に文壇に名聲を博せり。短篇の詩にも名吟多し。

(12) ヰルヘルム、ハインリヒ、リール。

千八百二十三年五月六日萊因河に沿へるビープリッヒに生まる。リールはバイエルンの國立博物館長にして、古器物保存會長を兼ねたり。千

1. Ernst von Wildenbruch.
イ. Balladen und Lieder.
ロ. Meister von Tanagra.

八百九十七年十一月十六日ミュンヒェンに死す。

リールは、文明史に關する論文數篇と小説とを以て其名、文壇に知らる。

第三章　最近の獨逸文壇。

(1) エルンスト、フォン、ヰルデンブルフ。

現今の獨逸に於て詩人として、先づ指を屈す可きは、ヰルデンブルフなり。ヰルデンブルフは、千八百四十五年二月三日シイリエンのバイルートに生まる。當時父は、總領事にして、此地に在職したりき。詩人ヰルデンブルフは、國民の義務として、一たびは、銃劍を荷うて、軍隊に入り、千八百七十年普佛戰爭起るや、勇んで從軍せり。現今公使館書記官の名譽職に任ぜられ、帝室の優遇を受けて伯林に住せり。

ヰルデンブルフは、愛國詩人として、特に其名を知らる。詩集(イ)『バラード、ウント、リーデル』中收むる所の諸篇は、獨逸青年の志氣を皷舞し、愛國の精神を發揮したり。小説の傑作は、(ロ)『マイステル、フォン、タナグラ』

ト. Heinrich und sein Geschlecht.
2. Martin Greif.
チ. Cordz Ulfeld.
ハ. Der Mennonit.
ニ. Harald.
ホ. Die Karolinger.
ヘ. Die Quitzows.

なり。

かくホルデンブルフは、詩に於て、小說に於て、尋常一樣の作家にあらずと雖も、最も群を拔いて名をなせしは、劇詩にあり。(ハ)『デル、メンノニート』、(ニ)『ハラルド』、(ホ)『ディ、カロリンゲル』、(ヘ)『ディ、クヰッツォース』等の諸曲は、名聲頗る喧々たり。『ディ、クヰッツォース』曲は、多年の戰亂に荒れ果たるプランデンブルグが、フリードリヒ、フォン、ホーヘンツォルレルンの功勳によりて、國勢を挽回したる事蹟を叙したるものにして、フリードリヒを平和の保護者として尊崇せり。千八百八十四年ホルデンブルフは、劇詩人として大名譽を得たり。最近の作は、二部よりなれる劇詩(ト)『ハインリヒ、ウント、ザイン、ゲシュレヒト』なり。

(2) マルティン、グライフ。

千八百三十九年六月十八ロシバイエルに生まれ、現今ミュンヒェンに住せり。

グライフは、抒情詩人にして、且つ劇詩人なり。作中(チ)『コルフィーツ、ウ

4. Theodor Fontane.
レ. Vor dem Sturm.
ソ. Wanderungen durch die Mark Brandenburg.
5. Hans Hoffmann.
カ. Konradin der letzte Hohenstaufe.
ヨ. Hans Sachs.
タ. General York.
3. Karl Stieler.
リ. Nero.
ヌ. Marino Faliери.
ル. Prinz Eugen.
オ. Heinrich der Löwe.
ワ. Die Pfalz am Rhein.

ールフェルド』、(リ)『チロ』、(ス)『マリノ、ファリエリ』、(ル)『プリンツ、オイゲーン』、(オ)『ハインリヒ、デル、ロェーエ』、(ワ)『ディ、プファルツ、アム、ライン』、(カ)『コンラディン、デル、レッツテ、ホーヘンシタウフェ』、(ヨ)『ハンス、ザックス』、(タ)『ゲネラール、ヨルク』等の諸曲は、著名なり。

(3) カール、スティーレル。

千八百四十二年ミュンヒェンに生まれ、千八百八十五年に死す。

スティーレルは、方言詩を以て名あり。

(4) テオドール、フォンターネ。

千八百十九年十二月三十日ノイルッピーンに生まれ、千八百九十八年九月二十日伯林に死す。

フォンターネの作にては、小說(レ)『フォール、デム、シュツルム』及び(ソ)『ワンデルンゲン、ツルヒ、ディ、マルク、ブランデンブルク』の二篇著名なり。

(5) ハンス、ホッフマン。

千八百四十八年七月二十七日シテッティーンに生まれ、現今エルニゲロ

ム. Wider den Kurfürsten.
ウ. Der eiserne Rittmeister.
6. Rudolf Baumbach.
ツ. Der Hexenprediger.
ヲ. Im Lande der Phäaken.
ナ. Neue Korfugeschichten.
ラ. Gymnasium zu Stolpenburg.

ーデに住す。

ホッフマンは、小説家なり。(ツ)『デル、ヘキセンプレディゲル』(ヲ)『イム、ランデ、デル、フェアケン』(ナ)『ノイエ、コルフーゲシヒテン』(ラ)『ギムナシウム、ツー、シュトルペンプルグ』(ム)『ヰデル、デン、グールフェルステン』(ウ)『デル、アイゼルヲ、リットマイステル』等の作あり。

(6) ルードルフ、バウムバハ。

千八百四十一年九月二十八日チューリンゲンのクラニヒフェルドに生まれ、現今マイニンゲンに住す。

バウムバハは、抒情、叙事双方の才を兼ねたり。叙事詩にては『ヒルデ、ウント、ホランド』及び『ツラトローグ』の二篇、抒情詩にては『リーデル、アイヲス、ファーレンデン、ゲゼルレン』『フォン、デル、ランドシトラーセ』『フラウ、ホルデ』『マイン、フリューヤール』等の數篇あり。此外『アーベントイエル、ウント、シュエンク』『デル、バーテ、デス、トーデス』『クルーグ、ウント、ティンテンフアス』『カイゼル、マックス、ウント、ザイン、エーゲル』『チューリンゲル、リーデル』等あり。

(7) フリードリヒ、ヰルヘルム、エーベル。

千八百十三年十二月二十六日エストファーレンのアルハウゼンに生まれ、千八百九十四年四月五日ニーハイムに死す。

叙事詩『ドライッエーンリンデン』を始め『ヘルプストブレッテル』『ゴリアト』等は、エーベルの作中最も名あり。

(8) ゲオルグ、エーベルス。

千八百三十七年三月一日伯林に生まれ、千八百九十八年八月七日ツッチングに死す。エーベルスは、小説家なり。(ヰ)『エギプティッシェー、ゲーニヒストホテル』(ノ)『ホモ、スム』(ヲ)『ディ、フラウ、ビュルゲルマイステリン』(ク)『クレオパトラ』(ヤ)『イム、シュミーデフォイエル』等の作及び自傳、(マ)『ゲシヒテ、マイヲス、レーベンス』あり。

(9) フェーリックス、ダーン。

千八百三十四年二月九日ハムブルグに生まれ、現今ブレスラウ大學

マ. Geschichte meines Lebens.
9. Felix Dahn.
ナ. Die Frau Bürgermeisterin.
ク. Kleopatra.
ヤ. Im Schmiedefeuer.
7. Friedrich Wilhelm Weber.
8. Georg Ebers.
ヰ. Ägyptische Königstochter.
ノ. Homo sum.

の教授なり。

ダーンの作として、其名最も世に知らるゝは、(ケ)『アイン、カムプフ、ウム、ローム』なり。此小説は、四卷より成り、伊太利に於ける東ゴート人の戰爭及び滅亡を叙したるものにして、千八百七十六年初版を刊行し、千八百九十三年迄には、十九版を重ねたり、次いで(フ)『ユリアン、デル、アプトリュンニゲ』出づ。其他人民移轉時代を叙したる八小篇、カール大帝時代の事を記したるコ)『ビス、ツーム、トーデ、ゲトロイ』、中古の武士を寫したる歴史小説(エ)『ディ、クロイッファーレル』、全世界滅落の迷信を題目とした る歴史的物語(テ)『エルトウンテルガング』、古代の神話によりたる(ア)『オヂーンス、トロースト』(サ)『ジンド、ゲッテル』等の作、數へ來れば、著名なるもの多し。

ダーンは、獨り小説家を以て甘んぜず、好んで詩材を、古代北方の勇者物語に取りて、バラードを作れり、劇詩に於てもキ)『ケーニッヒ、ローデリヒ』(ユ)『リューデゲル、フォン、ベヒラルン』三曲の如き佳作あり。

ケ. Ein Kampf um Rom.
フ. Julian der Abtrünnige.
コ. Bis zum Tode getreu.
エ. Die Kreuzfahrer.
テ. Weltuntergang.
ア. Odhins Trost.
サ. Sind Götter.
キ. König Roderich.
ユ. Rüdiger von Bechlarn.

(11) ヘルマン、ズーデルマン。

十九世紀餘す所僅かに拾餘年、此僅にして過ぎ行かば、フライタークは、既に老いたり、獨逸文壇はダーン、グライフ等を謳歌するに止まりしならん。さるに千八百八十七年(メ)『フラウ、ゾルゲ』の一作によりて、普ねく世人の注目を惹き、爾來獨逸文壇の驍將を以て目せらるゝ文豪出づ。之をヘルマン、ズーデルマンとなす。

ズーデルマンは、千八百五十七年東普魯西亞のマッチケンに生まる。小説と劇詩とは、其最も長ずる所なり。『フラウ、ゾルゲ』は、千八百八十七年初版を出し、千八百九十七年迄に版を重ぬること四十回なりき。此作の出でし年より千八百九十年迄年々相續いて(ミ)『ディ、ゲシュヰステル』(シ)『デル、カッツェンステーク』(エ)『イム、ツヰーリヒト』の三作出で、此外、(ヒ)『ロランテス、ホーホツァイト』(モ)『エス、ブール』の諸作あり。劇詩にては『名譽』(セ)(ディ、エーレ)『故郷』(ス)(ディ、ハイマート)『ソドムの最後』(ン)(ソドムス、エンデ)(イ)『ダス、グリュック、イム、ヰンケル』(ロ)『エス、レーベ、ダス、レーベン』(ハ)

ン. Sodoms Ende.
イ. Das Glück im Winkel.
ロ. Es lebe das Leben.
ハ. Der arme Heinrich.
ニ. Im Twilicht.
ホ. Jorantes Hochzeit.
ヘ. Es war.
ト. Die Ehre.
チ. Die Heimat.
11. Hermann Sudermann.
メ. Frau Sorge.
ミ. Die Geschwister.
シ. Der Katzensteg.

デル、アルメ、バインリヒ』等の名作あり。

ズーデルマン尚老たりとなさず、末來は豫期し難しと雖も、今後更に大傑作を試みて可なり。充分なる評論の筆を下すは、詩人が蓋棺の後なりとす。

(12) グルハルト、ハウプトマン。

獨逸現今の文壇に於て、ズーデルマンと並び稱せられて、名聲嘖々たるは、ハウプトマンなり。ハウプトマンは、ズーデルマンより五才の弟にして、千八百六十二年十二月十五日ザルツブルンに生る。

ハウプトマンが、詩才を揮へるは、劇詩なり、而してメールヒェンの題目を骨子としたるを以て、メルヘンドラマと稱せらるゝものあり。(ニ)『ディ、エーベル、』(ホ)『ハチレ、』(ヘ)『アインザーメ、メンシェン、』(ト)『ディ、フェルズンケチ、グロッケ』等の諸曲あり。そが中にも『沈鐘』(ディ、フェルズンケチ、グロック)は、今日迄の作中最も傑作と稱せらる。此曲の詩材は、メールヒェン中の一小話に過ぎずと雖も、靈妙の筆致によりて、劇詩の逸品と稱せらるゝ

ニ. Die Weber.
ホ. Hannele.
ヘ. Einsame Menschen.
ト. Die Versunkene Glocke.

12. Gerhart Hauptmann.

至れり。此兩人の優劣は、遽かに論定し難しと雖も、概して新派の批評家は、ハウプトマンを推し、舊派の人々は、ズーデルマンを揚ぐるが如し。

(13) デトレーヴ、フォン、リヽエンクローン。

小說界、劇詩界は、ズーデルマン、ハウプトマン二傑の出づるに及んで、頓に、一段の光彩を放つに至れり。此時に當り抒情詩人出づ、リヽエンクローンは其人なり、千八百四十四年六月三日キール市に生まる。

母音の發音によりて、叙景の明暗を區別し、詩句に大文字を用ゐずして一見名詞、動詞の別を糺かず、主として、詩歌と音樂との調和を計らんとするは、此一派の詩人が企てたる所にして、今尚研究を續けつゝあり。二十世紀の獨逸抒情詩の發展は、リヽエンクローンに嚆矢する所多かるべきなり。

(14) ユリウス、ヴルフ。

千八百三十四年九月十六日クエドリンブルグに生まる、獨逸現今の詩人中屈指の一に數へらる。二叙事詩（ト）『デル、ラッテンフェンゲル、フォン、ハ

14. Julius Wolff.
ト. Der Rattenfänger von Hameln.

13. Detlev von Liliencron.

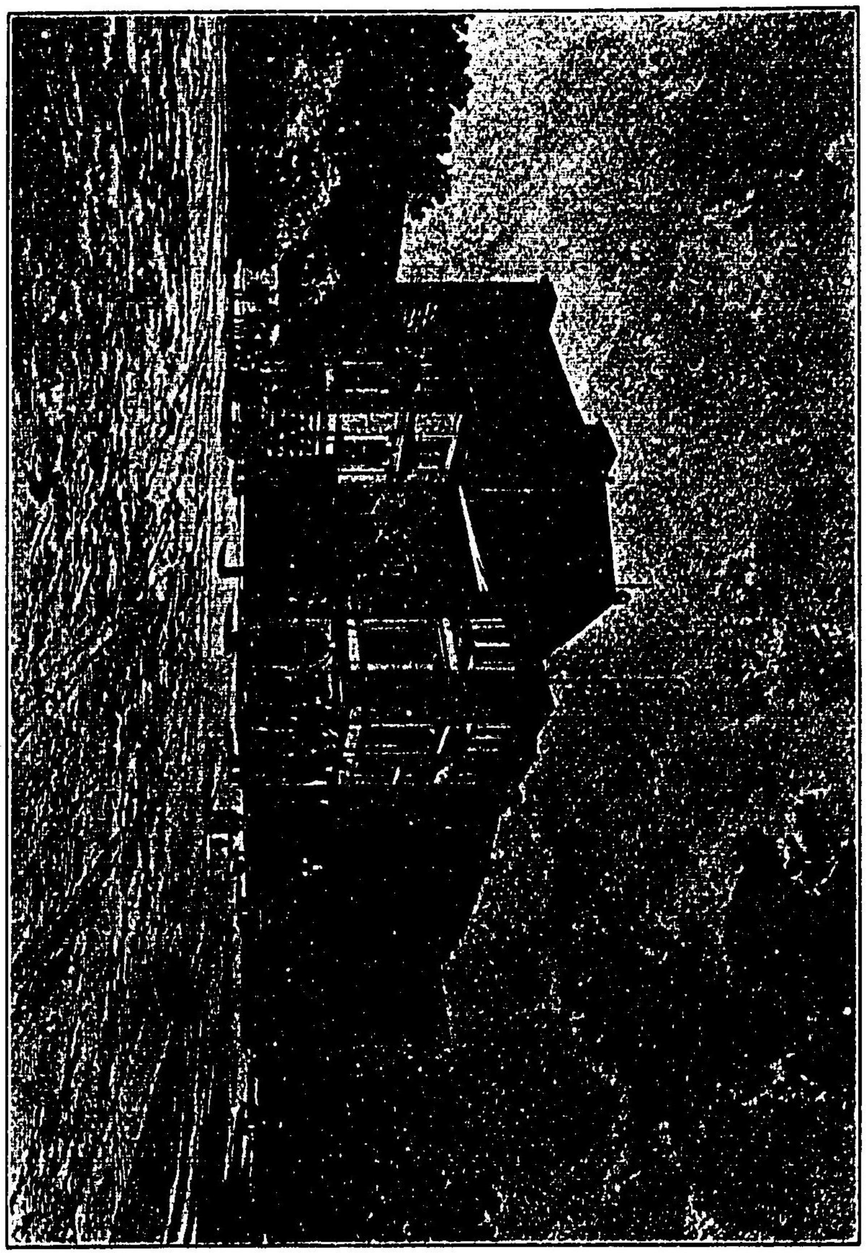
ト、メルン、』(チ)『デル、ヤルデ、イエーゲル』(猛き獵夫)及び(リ)『デル、タンホイゼル』等の諸篇は、ワルフの佳作と稱せらるゝものにして、千八百八十三年に出でたる歴史小說(ヌ)『デル、ジュルフマイステル』の一篇は、敍述の巧妙を以て名あり。

此他數へ來れば、(15)カール、ブッセ(16)フェルディナント、アエナリウス、(17)アドルフ、ヤルドブラント(18)アードルフ、シュテルン(19)テオドール、フィッシェル等枚擧に遑あらず。獨逸文壇の前途頗る多望。

獨逸國民文學史終

19. Theodor Vischer. 16. Ferdinand Avenarius. 17. Adolf Wildbrandt. 18. Adolf Stern.

チ. Der wilde Jäger. リ. Der Tannhäuser. ヌ. Der Süllmeister. 15. Carl Busse.

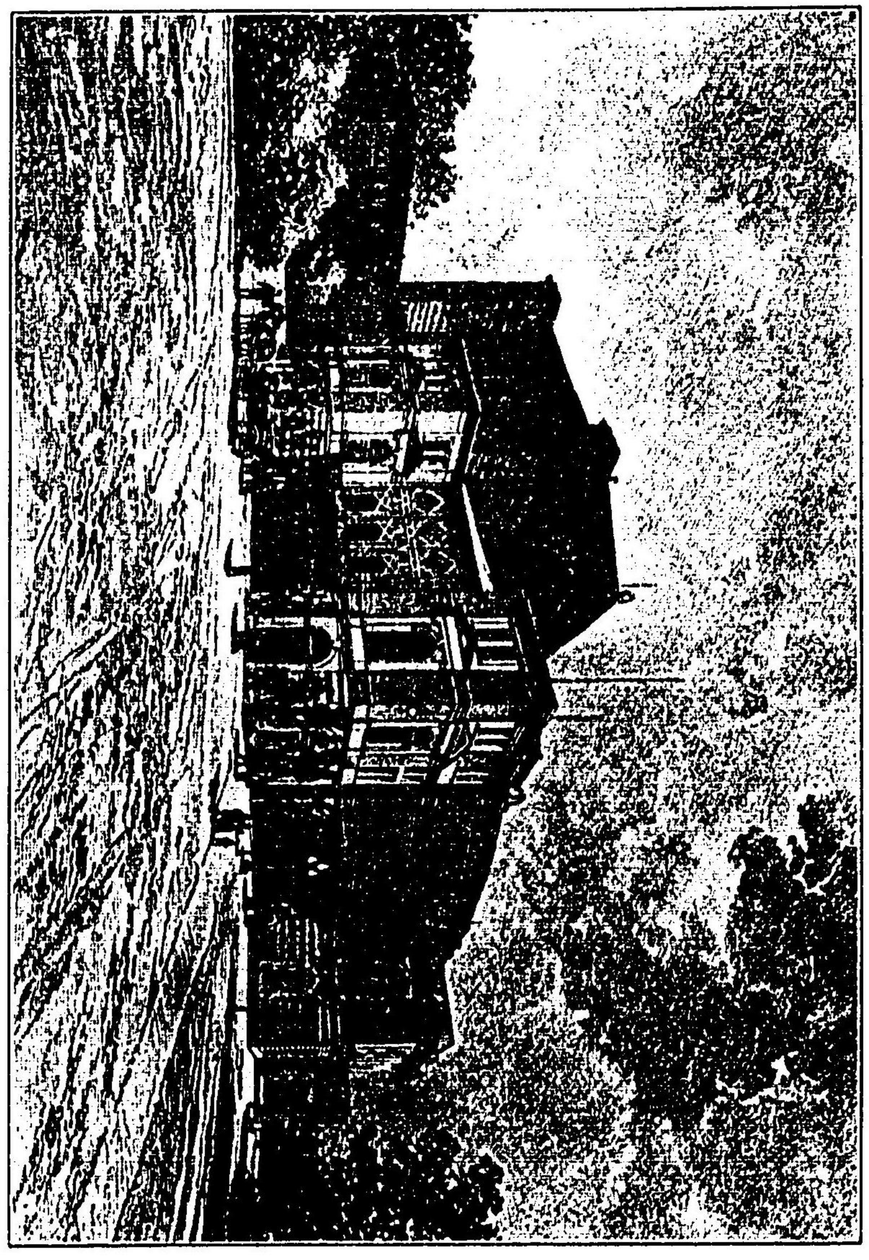


19. Theodor Vischer.
16. Ferdinand Avenarius.
17. Adolf Wildbrandt.
18. Adolf Stern.
チ. Der wilde Jäger.
リ. Der Tannhäuser.
ヌ. Der Müllmeister.
ル. Carl Busse.

ーメルン』(チ)『デル、ヰルデ、イェーゲル』(猛き獵夫)及び(リ)『デル、タンホイゼル』等の諸篇は、ヲルフの佳作と稱せらるゝものにして、千八百八十三年に出てたる歴史小説(ヌ)『デル、ジュルンマイスステル』の一篇は、叙述の巧妙を以て名あり。

此他數へ來れば(15)カール、ブッセ(16)フェルディナント、アエナリウス。(17)アドルフ、ヰルドブラント(18)アードルフ、シュテルン(19)テオドール、フィッシェル等枚擧に遑あらず。獨逸文運の前途頗る多望。

獨逸國民文學史終



ナイロイス

人名索引

〔次に列擧する人名は頁の上註となせしものに限る〕

（數字は頁數を示す）

Albert, Heinrich .....190. (1604—1651)
Alexis, Wilibald.....566. (1798—1871)
Anzengruber.....531. (1839—1889)
Arndt, Ernst Moritz.....539. (1769—1860)
Arnim, Achim von .....512. (1781—1831)
Aue, Hartmann von .....112.
Auerbach, Berthold.....567. (1812—1882)
Ayrer, Jakob .....169. (　　+1605)
Avenarius, Ferdinand.....586. (1856—　　)

Baumbach, Rudolf ..... 580. (1841—　　)
Besser, Johann von .....200. (1655—1729)
Bodenstedt, Friedrich .....561. (1819—1892)
Bodmer, Johann Jakob.....213. (1698—1783)
Brant, Sebastian.....143. (1457—1521)
Breitinger, Johann Jakob .....213. (1701—1776)
Brentano, Clemens .....512. (1778—1842)
Brockes, Heinrich.....202. (1680—1747)
Bürger, Gottfried A. .....245. (1747—1794)
Busse, Carl.....586. (1872—　　)

Canitz, Freiherr von .....199. (1654—1699)
Chamisso, Adalbert von .....532. (1781—1838)

Görres, Joseph von .....520. (1776—1848)
Goethe.....339. (1749—1832)
Gottfried von Strassburg .....122.
Gotthelf, Jeremias .....566. (1797—1854)
Gottsched .....209. (1700—1766)
Greif, Martin.....578. (1839—)
Grillparzer .....524. (1791—1872)
Grimmelshausen, Ch. von .....204. (+1676)
Groth, Klaus .....573. (1819—1899)
Grün, Anastasius .....527. (1806—1876)
Gryphius, Andreas .....194. (1616—1664)
Günther, Christian .....200. (1695—1723)
Gutzkow, Karl..... .....554. (1811—1878)

Hagedorn, Friedrich von .....219. (1708—1754)
Haller, Albrecht von .....218. (1708—1777)
Halm, Friedrich .....527. (1806—1871)
Hamerling, Robert .....529. (1830—1889)
Hauff, Wilhelm .....552. (1802—1827)
Hauptmann, Gerhart .....584. (1862—)
Hausen, Friedrich von.....129.
Hebbel, Friedrich..... ....568. (1813—1863)
Heine, Heinrich .....537. (1797—1856)
Herder, ...325. (1744—1803)
Heyse, Paul .....562. (1830—)
Hölderlin, Friedrich.....504. (1770—1843)
Hoffmann, von Fallersleben .....557. (1798—1874)
Hofmann, von Hafmannswaldau .....197. (1618—1679)

Dach, Simon .....190. (1605—1659)
Dahn, Felix .....581. (1834—)
Droste-Hülshoff, A. von .....559. (1797—1848)

Ebers, Georg .....581. (1837—1898)
Ebert, Egon .....528. (1801—1882)
Eckhart, Meister.....153. (+1327)
Eichendorff, Freiherr von .....534. (1788—1857)
Ems, Rudolf von.....123. (+1254)
Eschenbach, Wolfram von .....117. (+1220)

Falke, Gustav .....586. (1853—)
Feuchtersleben, E. v .....529. (1806—1849)
Fischart, Johann..... 169. (1550—1590)
Fischer, Johann Georg .....553. (1816—1897)
Fleming, Paul .....187. (1609—1640)
Folz, Hans ....143.
Fontane, Theodor .....579. (1819—1898)
Forster, Georg.....491. (1754—1794)
Fouqué, de la Motte .....522 (1777—1843)
Freiligrath, Ferdinand .....556. (1810—1876)
Freytag, Gustav .....569. (1816—1895)

Geibel, Emanuel .....559. (1815—1884)
Geiler von Kaisersberg .....144. (1445—1510)
Gellert, Chr. Fürchtegott .....223. (1715—1769)
Gilm, Hermann .....530. (1812—1864)
Gleim, Ludwig .....221. (1719—1803)

Meissen, Heinrich von ..... 133. (+1318)
Meyer, Konr. Ferd ..... 576. (1825—1898)
Mörike, Eduard ..... 551. (1804—1875)
Möser, Justus ..... 490. (1720—1794)
Montfort, Hugo von ..... 139.
Morungen, Heinrich von ..... 129.
Mosen, Julius ..... 555. (1803—1867)
Moscherosch ..... 208. (1601—1669)
Müller, Wilhelm ..... 535. (1794—1827)
Murner, Thomas ..... 163. (1475—1537)

Neidhart ..... 132.
Novalis (v. Hardenberg) ..... 512. (1772—1801)

Opitz, Martin ..... 182. (1597—1639)

Paulus, Eduard ..... 553. (1837—)

Paul, Gerhardt ..... 191. (1607—1676)
Pichler, Adolf ..... 530. (1819—1900)
Platen, Graf von ..... 536. (1796—1835)

Raabe, Wilhelm ..... 575. (1831—)
Ranke, Leopold von ..... 497. (1795—1886)
Reinmar der Alte ..... 129.
Reuter, Fritz ..... 574. (1810—1874)
Richter, (Jean Paul Friedrich) ..... 499. (1763—1825)
Riehl, H. Wilhelm ..... 576. (1823—1897)

Hoffmann, E. Th. W. ..... 523. (1776—1822)
Hoffmann, Hans ..... 579. (1848—)
Holtei, Karl von ..... 573. (1798—1880)
Humboldt, Alexander von ..... 495. (1769—1859)
Humboldt, Wilhelm von ..... 493. (1767—1835)
Hutten, Ulrich von ..... 163. (1488—1523)

Immermann, Karl ..... 535. (1796—1840)

Jordan, Wilhelm ..... 563. (1819—)

Keller, Gottfried ..... 576. (1815—1890)
Korner, Justinus ..... 550. (1786—1862)
Kinkel, Gottfried ..... 557. (1813—1882)
Kleist, Heinrich von ..... 520. (1777—1811)
Klopstock ..... 227. (1724—1803)
Körner, Theodor ..... 543. (1791—1813)

Laube, Heinrich ..... 555. (1806—1884)
Lenau, Nikolaus ..... 526. (1802—1850)
Lessing ..... 255. (1729—1781)
Lichtenstein, Ulrich von ..... 133. (+1275)
Lilieneron, Detlev von ..... 585. (1844—)
Lingg, Hermann ..... 562. (1820—)
Logau, Friedrich von ..... 189. (1604—1655)
Lohenstein, von ..... 197. (1635—1683)
Ludwig, Otto ..... 569. (1813—1865)
Luther, Martin ..... 154. (1483—1546)

Roberthin, Robert .....190. (+1648)
Roquette, O. .....562. (1824—1896)
Rosegger, Peter.....531. (1843—)
Rosenblüt, Hans .....143.
Rückert, Friedrich .....545. (1788—1866)

Saar, Ferdinand von .....530. (1833—)
Sachs, Hans.....165. (1494—1576)
Schack, A. Fr. von.....561. (1815—1895)
Scheffel, Joseph Viktor .....563. (1826—1886)
Scheffler, Johann.....191. (1624—1677)
Schenkendorf, Max von.....545. (1783—1817)
Schiller .....438. (1759—1805)
Schlegel, August Wilh.....512. (1767—1845)
Schlegel, Friedrich.....516. (1772—1829)
Schnabel, Joh. Gottfr .....207.
Schulze, Ernst.....532. (1789—1817)
Schwab, Gustav.....550. (1792—1850)
Seidl, Gabriel .....528. (1804—1875)
Seume .....537. (1763—1810)
Simrock, Karl .....558. (1802—1876)
Spee, Friedrich von .....191. (1592—1635)
Spielhagen, Friedrich.....574. (1829—)
Stern, Adolf .....586. (1835—)
Stieler, Karl.....579. (1842—1885)
Stifter, Adalbert .....529. (1806—1868)
Storm, Theodor.....575. (1817—1888)
Strachwitz, Moritz Graf .....559. (1822—1847)

Sudermann, Hermann .....583. (1857—)
Suso, Heinrich .....153. (1295—1366)

Tauler, Johannes.....153. (+1361)
Tieck, Ludwig.....517. (1773—1853)
Treitschke, Heinrich von .....498. (1834—1896)

Uhland .....548. (1787—1862)

Veldeke, Heinrich.....111. 129.
Vogelweide, W. v. d.....130. (+1230)
Vogl, Nepomuk.....527. (1802—1866)
Voss, Joh. Heinrich.....247. (1751—1826)

Wagner, Richard .....564. (1813—1883)
Weber, Fr. Wilh .....581. (1813—1894)
Weise, Christian .....199. (1642—1708)
Werner, Zacharias .....522. (1768—1823)
Wernicke, Christian .....201. (+1725)
Wieland .....238. (1733—1813)
Wilbrandt, Adolf.....586. (1837—)
Wildenbruch, Ernst von .....577. (1845—)
Wolff, Julius .....585. (1834—)
Wolkenstein, Oswald von .....139. (+1445)
Würzburg, Konrad von.....123. (+1287)

Zedlitz, Freiherr von .....526. (1790—1862)

（若し本文と索引との年代に相違あらは索引のを正とす。又年代記入なきは不確定のものなり。）

明治三十七年九月二十日印刷
仝　年九月廿三日發行

國語國民文學史與付
定價金壹圓四拾錢

著者　葉山萬次郎
東京市神田區裏神保町九番地

發行者　合資會社富山房
代表者　同所　社長　坂本嘉治馬

印刷者　東京市京橋區四紺屋町廿六七番地　佐久間衡治

印刷所　東京市京橋區四紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

著作權所有

發行元（明治廿九年六月設立）
合資會社富山房
（特）電話本局一千三十六番

東京合資會社冨山房出版圖書特約販賣所

▲特約販賣規則御入用の方は郵券貳錢封入申込まれたし▼

東京神田區 東京堂
仝 文會堂
仝 林平次郎
仝 東海堂

[illegible]

▲出版圖書目錄御入用の節は御申越次第進呈可仕候▼

45
437

45
437

084782-000-8

45-437

独逸国民文学史

葉山　万次郎／著

M37

DBA-0127